

# 飯倉F遺跡2

— 飯倉F遺跡第4次・第5次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第972集

2008

福岡市教育委員会

# 飯倉F遺跡 2

— 飯倉F遺跡第4次・第5次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第972集



遺跡略号	調査番号
IKF-4	0607
IKF-5	0649

2008

福岡市教育委員会



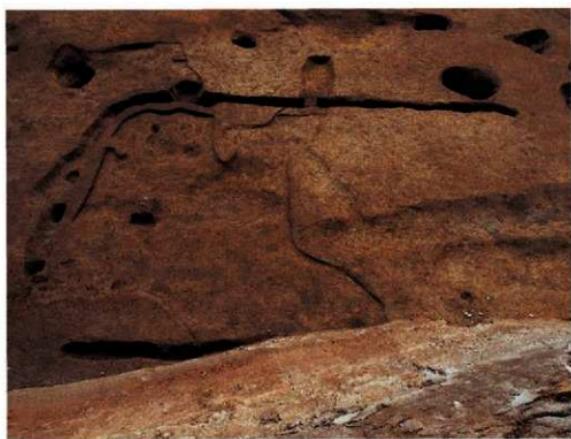


調査地周辺航空写真

卷頭圖版2



1. 第4次調査SB76



2. 第4次調査SD94



1. 第4次調査SP91遺物出土状況



2. 第4次調査SP69出土土器一括

卷頭圖版4



1. 第4次調査SP91出土土器一括



2. 第5次調査出土鉄製鋤先

## 序

福岡市は玄界灘に面し、古代より大陸・半島との交流が絶え間なく行われてきました。そのため福岡市域には多くの遺跡が残されています。近年の著しい都市化による開発により失われるこれらの文化財を後世に伝えるのは、本市教育委員会にとっての重要な責務であります。

本書は、西南社の湖畔公園整備工事に伴い調査を実施した飯倉F遺跡第4次・第5次発掘調査について報告するものです。今回の調査では弥生時代後期から古代にかけての竪穴住居・掘立柱建物、鉄製劍先・埋納されたとみられる弥生土器などが発見されました。これらは早良平野の歴史を解明する上で重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の一資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで多くのご協力を賜りました関係者の方々に対し、心から謝意を表します。

平成 20年 3月 31日

福岡市教育委員会  
教育長 山田 裕嗣

## 例　　言

- 本書は福岡市教育委員会が西南社の湖畔公園整備工事に伴い、福岡市城南区七隈6丁目地内において実施した柵倉F遺跡第4次・第5次発掘調査の報告書である。
- 本書に掲載した遺構実測図は阿部泰之が作成した。
- 本書に掲載した遺物実測図は阿部・平川敬治・相原聰子が作成した。
- 本書に掲載した挿図の製図は阿部がおこなった。
- 本書に掲載した写真は阿部が撮影した。
- 本書で用いた方位はすべて磁北で、真北より約6°30' 西偏する。
- 本書記載の埋蔵文化財包蔵地範囲はすべて平成6年3月現在の推定線であり、それ以降の埋蔵文化財包蔵地範囲については変動の可能性があるため詳細は福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課にて確認されたい。
- 遺構の呼称は獨立柱建物をSB、竪穴住居をSC、溝をSD、土壙をSK、ピットをSP、炉跡をSRと略称する。遺構番号は重複を避けるため現場で付した通し番号を原則そのまま用いている。
- 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
- 第5次調査出土の鉄器鋸取りおよび保存処理については比佐陽一郎氏（福岡市埋蔵文化財センター）に依頼した。
- 本書の執筆・編集は阿部が行った。
- 本書で報告する発掘調査の細目は以下の通りである。

### （第4次調査）

遺跡調査番号	0607		遺跡略号	I K F - 4
地番	福岡市城南区七隈6-11他		分布地図番号	No.074 七隈
開発面積	45,000m <sup>2</sup>	調査対象面積	2,310m <sup>2</sup>	調査面積
調査期間	平成18年4月10日～7月14日			

### （第5次調査）

遺跡調査番号	0649		遺跡略号	I K F - 5
地番	福岡市城南区七隈6-14他		分布地図番号	No.074 七隈
開発面積	45,000m <sup>2</sup>	調査対象面積	1,000m <sup>2</sup>	調査面積
調査期間	平成18年10月16日～11月30日			

## 本文目次

はじめに .....	1
第1章 位置と環境 .....	2
第2章 第4次調査の記録 .....	5
第3章 第4次調査のまとめ .....	24
第4章 第5次調査の記録 .....	29
第5章 第5次調査のまとめ .....	46

## 挿図目次

Fig.1 飯倉F遺跡と周辺の主な遺跡 (1/25,000) .....	3
Fig.2 調査区位置図 (1/5,000) .....	4
Fig.3 第4次調査区位置図 (1/1,000) .....	5
Fig.4 調査区北壁および南壁土層断面実測図 (1/40) .....	6
Fig.5 第4次調査区全体図 (1/400) .....	7
Fig.6 SB76実測図 (1/60) .....	8
Fig.7 SB102・201実測図 (1/60) .....	9
Fig.8 SB202実測図 (1/60) .....	10
Fig.9 SB203実測図 (1/60) .....	11
Fig.10 挿立柱建物出土遺物実測図 (1/3) .....	11
Fig.11 SD24・71実測図 (1/100) .....	12
Fig.12 SD94実測図 (1/60) .....	12
Fig.13 SD24・71・94出土土器実測図 (1/3) .....	13
Fig.14 SD66出土土器実測図 (1/3) .....	13
Fig.15 SP69実測図 (1/20) .....	14
Fig.16 SP91実測図 (1/20) .....	14
Fig.17 SP69出土土器実測図 (1/3) .....	15
Fig.18 SP91出土土器実測図 (1/3) .....	16
Fig.19 その他のピット出土土器実測図 (1/3) .....	17
Fig.20 SB102出土柱材・SD66出土杭実測図 (1/3) .....	17
Fig.21 包含層01出土遺物実測図 (1/3) .....	18
Fig.22 包含層01下層出土遺物実測図 (1/3) .....	19
Fig.23 遺物包含層出土赤生土器実測図 (1/3・1/6) .....	20
Fig.24 その他の遺物実測図 (1/3) .....	21
Fig.25 第4次調査出土石器・石製品・金属器実測図 (1/6・1/3・1/2) .....	22
Fig.26 SX109出土舟形削片実測図 (1/1) .....	23
Fig.27 第5次調査区位置図 (1/1,000) .....	29
Fig.28 調査区西壁土層断面実測図 (1/120) .....	29
Fig.29 第5次調査区全体図 (1/200) .....	30
Fig.30 SB03・05実測図 (1/80) .....	31
Fig.31 SB12・201実測図 (1/80) .....	32
Fig.32 SB202・203・204・205・206実測図 (1/80) .....	33
Fig.33 SC28・73・77実測図 (1/60) .....	34
Fig.34 SC85実測図 (1/60) .....	35
Fig.35 SC28・73出土土器実測図 (1/3) .....	35
Fig.36 SC77出土土器実測図 (1/3) .....	35
Fig.37 SD01土層断面実測図 (1/40) .....	36
Fig.38 SD01出土土器実測図① (1/3・1/6) .....	37
Fig.39 SD01出土土器実測図② (1/3) .....	38

Fig.40 SD01出土土器実測図③ (1/3) .....	39
Fig.41 SD01出土土器実測図④ (1/3・1/6) .....	40
Fig.42 SD01出土鉄製品実測図 (1/3) .....	41
Fig.43 SD97・111実測図 (1/60) .....	42
Fig.44 SD97出土土器実測図 (1/3) .....	42
Fig.45 SK68・141・142・143・144実測図 (1/30) .....	43
Fig.46 SR02実測図 (1/40) .....	44
Fig.47 ピット出土土器実測図 (1/3) .....	45
Fig.48 第5次調査出土石器実測図 (1/4・1/3・1/1) .....	45

## 図 版 目 次

### (第4次調査)

- PL1-1 1区南部全景 (南より)
- PL1-2 1区南部全景 (北より)
- PL1-3 1区包含層掘り下げ後全景 (西より)
- PL2-1 SD24 (北より)
- PL2-2 SD66 (北より)
- PL2-3 SD66南壁土層 (北より)
- PL3-1 1区北部全景 (南より)
- PL3-2 2区北部全景 (南より)
- PL3-3 SB102 (南より)
- PL4-1 SB102P-2 柱材出土状況 (南より)
- PL4-2 2区南部全景 (北より)
- PL4-3 2区南部ピット検出状況 (北より)
- PL3-2 SB205 (東より)
- PL3-3 竪穴住居SC73・77・85 (東より)
- PL4-1 SC28 (南より)
- PL4-2 SC77炉跡 (南より)
- PL4-3 テラス部 (SD01) 全景 (東より)
- PL5-1 テラス部 (SD01) 土層断面 (東より)
- PL5-2 炉跡SR02 (北より) SC77 (西より)
- PL5-3 SK68 (北より)
- PL6-1 SK142 (南より)
- PL6-2 SK143 (東より)
- PL6-3 SK144 (南より)

### (第5次調査)

- PL1-1 調査区北部全景 (東より)
- PL1-2 調査区南部全景 (東より)
- PL1-3 SB03・202 (東より)
- PL2-1 SB05 (西より)
- PL2-2 SB12 (西より)
- PL2-3 SB201 (西より)
- PL3-1 SB203 (南より)

# はじめに

## 1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第1課）は、都市整備局公園建設課から城南区七隈6丁目地内において、西南杜の湖畔公園整備工事に伴う当該事業地における埋蔵文化財事前審査願（都整第1593号）の提出を2005（平成17）年10月21日付で受けた。申請地は周知の埋蔵文化財包含地である飯倉F遺跡・同G遺跡、千隈古墳群B群・同C・同E群に含まれていることから、2005（平成17）年11月から2006（平成18）年1月にかけ確認調査を実施した。その結果、当該事業地は丘陵の頂部とその東側の氾濫原から構成され、丘陵上の北東端部および氾濫原で遺構・遺物の存在が確認できた。この成果を元に両者で協議を行い、公園整備工事によって遺構の破壊を免れない遺構・遺物の検出部分について本調査を実施することとした。発掘調査は2次にわけて実施し、それぞれ飯倉F遺跡第4次・第5次調査とした。第4次調査は平成18年4月10日から、第5次調査は同年10月16日から発掘調査を開始し、翌平成19年度に資料整理・調査報告書作成を行なった。

## 2. 調査組織

調査委託：都市整備局公園建設課

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第2課）

調査括弧：埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第2課）課長 山口謙治（前任） 力武卓治（現任）

同課調査第1係長 池崎謙二（前任） 杉山富雄（現任）

調査庶務：文化財整備課（現・文化財管理課） 後藤泰子（前任） 井上幸江（現任）

事前審査：埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第1課）

事前審査係長 滝石哲也（前任） 吉留秀敏（現任）

同係主任文化財主事 吉留秀敏（前任） 宮井善朗（現任）

同係文化財主事 井上蘿子（前任） 星野恵美（現任）

調査担当：埋蔵文化財課調査第2係（現・埋蔵文化財第2課調査第1係） 阿部泰之

調査作業：田中昭子 社節子 永井ゆり子 西口キミ子 三谷朗子 緑永洋二郎 木田ひろ子 古

庄孝子 梅野真澄 松本順子 西川吾郎 神原堅 脇山千代美 田原忠昭 阿比留忠義

菅野武 尾崎泰正 岩永いさ子 栗木昭孝 須佐恵司 磯村恵子 嶋啓子 吉積百合子

整理作業：畠田慧 黒早苗 白須正枝

# 第1章 位置と環境

## 1. 地理的環境

現在の行政区では福岡市早良区に当たる早良平野は、背振山系から西方に派生する西山・飯盛山・叶岳に南から西を限られ、東は油山から北に派生する低丘陵に囲まれる平野である。東西約5km・南北約12kmを測るこの平野は背振山系に源を発する室見川とその支流によって開拓された冲積平野で、南西から北東に向かって緩やかに標高を下げる。現在は北部から幹線道路沿いに市街地化が進んでいるが、かつては博多湾沿岸部を除けば広大な水田地帯であったといってよい。

さて、先に油山から北に派生する低丘陵、と記したが、これが早良平野の東縁を画する飯倉丘陵で、砂レキ台地といわれる高位・低位段丘である。よって基盤層は粘質土・シルト～細砂の堆積層で一部頁岩・砂岩または粘板岩状、その下部は花崗岩バイラン土である。この丘陵上ははやくから耕地化・宅地化され、旧状をしのぶよすがはほとんどない。

飯倉F遺跡はこの丘陵上に形成された遺跡である。

## 2. 歴史的環境

飯倉丘陵とその周辺にはほぼ全面に遺跡が展開し、大きく飯倉遺跡群と括れる状況である。文化財部では丘陵に開拓された谷・鞍部等の地形で北からA～Hまで記号を付し便宜的に遺跡を区分している。地理的環境で述べたとおり丘陵上は開拓による削平のため旧状を窺うことは困難であるが、本遺跡群は旧石器時代から中世に至る遺構・遺物が出土する複合遺跡である。以下、各時代ごとに飯倉遺跡群の特筆すべき遺構・遺物について概観する。

先土器時代は、飯倉F遺跡第3次調査・飯倉G遺跡4・5次調査で遺物の出土が報告されるが、後代の遺構に混入する形で出土し、明瞭な包含層から出土したものではない。繰り返すが丘陵上は開拓による削平が著しいことも関係するとみられる。縄文時代は前期曾畠式土器がE遺跡で出土している。その他中期阿高式土器が千隈古墳群D1号墳の調査で出土している。その他石器・石器などが各遺跡で出土しているが、顯著な遺構はみられない。あるいはF遺跡の調査で検出された中央にピットを有する土壙がいわゆる「落とし穴」であれば、それが縄文の遺構になるかもしれない。いずれにせよ集落が営まれた痕跡はいまのところ認められない。飯倉丘陵に人間が本格的に進出するのは弥生前期末とみられる。

1963年、飯倉唐木遺跡で前期末の甕棺から細型銅剣、中期後葉の甕棺からは素環頭太刀が出土した。甕棺墓群は現在の飯倉6丁目付近、丘陵の一部が西に突出した地点に集中しており、遺地に際しなんらかの規制が働いたのかもしれない。G遺跡4・5次調査では中期後半頃の環濠が尾根を断ち切るような状況で検出されている。集落が進出するのは弥生時代後期からである。削平のため遺構の残りは悪いが、竪穴住居が各調査地点で検出されているほか、丘陵斜面で当該期の遺物包含層が検出されている。古墳時代は尾根上に多くの古墳が築かれる。G遺跡で後期の住居址が検出されているが数的には少數で、主に墓域として利用されている。調査例は少ないが前方後円墳の梅林古墳をはじめ、E遺跡では箱式石棺を主体とする前期古墳が調査された。

古代で顯著なのは鉄鋤の出土である。E遺跡南側の熊ソイ池東斜面で鉄鋤が採集される他、A遺跡2次調査、そしてF遺跡5次調査で炉壁が付着する精錬炉が出土し、丘陵上で製鉄が行われていた可能性を示唆している。



(遺跡の範囲は平成6年3月現在の推定線であり、現在は変更されている可能性があります。)

1. 飯倉F遺跡
2. 飯倉A遺跡
3. 飯倉B遺跡
4. 飯倉C遺跡
5. 飯倉D遺跡
6. 飯倉E遺跡
7. 飯倉G遺跡
8. 飯倉H遺跡
9. ケエゾノ遺跡
10. 別府遺跡
11. 茶山遺跡
12. 原東遺跡
13. 原遺跡群
14. 有田遺跡群
15. 有田木坪遺跡
16. 次郎丸高石遺跡

17. 免遺跡群
18. 野芥大蘇遺跡
19. 野芥遺跡群
20. 田村遺跡群

Fig.1 飯倉F遺跡と周辺の主な遺跡 (1/25,000)



Fig. 2 調査区位置図 (1/5,000)

## 第2章 第4次調査の記録

### 1. 調査概要

飯倉F遺跡第4次調査区は、飯倉F遺跡が位置する丘陵の東面、七隈川によって形成された氾濫原に位置する。調査地の層序は現地表面から-0.6m~1.2mで弥生時代後期および古代（7~8世紀頃）の遺物を含む遺物包含層、-約0.8~2mで遺構検出面である黄白~黄褐色砂礫層、検出面からさらに1~2m下で基盤面の花崗岩バイラン土となる。遺物包含層は調査区の西端に分布する。全面に広がるわけではない。基盤層は東に向かって傾斜し、包含層・砂礫層とも東に向かって低くなる。調査区は既存の水路を挟んで東西2箇所に分かれ、西側を1区、東側を2区と呼称する。

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物4棟・ピット多数である。ピットの中には複数の弥生土器が上下に重なった状態で出土したもののがみられた。ピット出土土器の時期は弥生時代後期初頭~前半頃とみられ、掘立柱建物の時期もこれに近いか同時期と推測される。今回の調査で出土した遺物はコンテナケース45箱にのぼる。包含層からは須恵器・弥生土器・石製穂道具・磨製石斧・ガラス化した炉壁・柱穴から弥生土器・自然地形ではあるが旧河川から弥生土器・須恵器が出土した。

### 2. 遺構と遺物

#### ①掘立柱建物 (SB)

SB76 (Fig.6) 1区北部で検出した。4間×4間の南北にやや長い側柱建物である。柱穴は長径0.4~0.7m前後を測る不整円形~橢円形を呈し、深さは0.3~0.6mを測る。周囲には遺物包含層が残り、建物

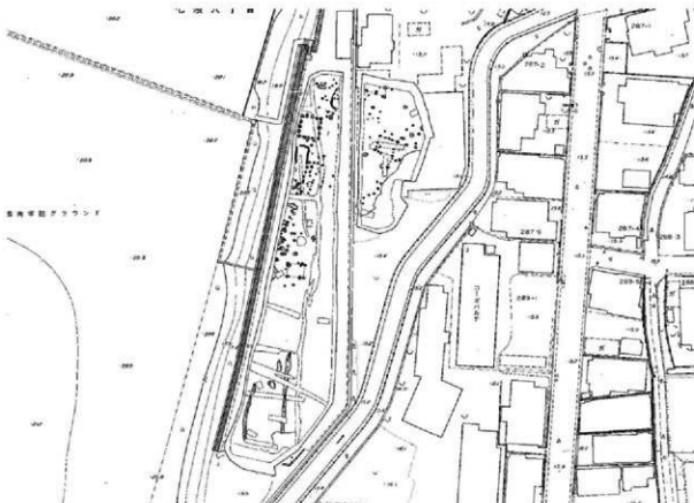


Fig.3 第4次調査区位置図 (1/1,000)

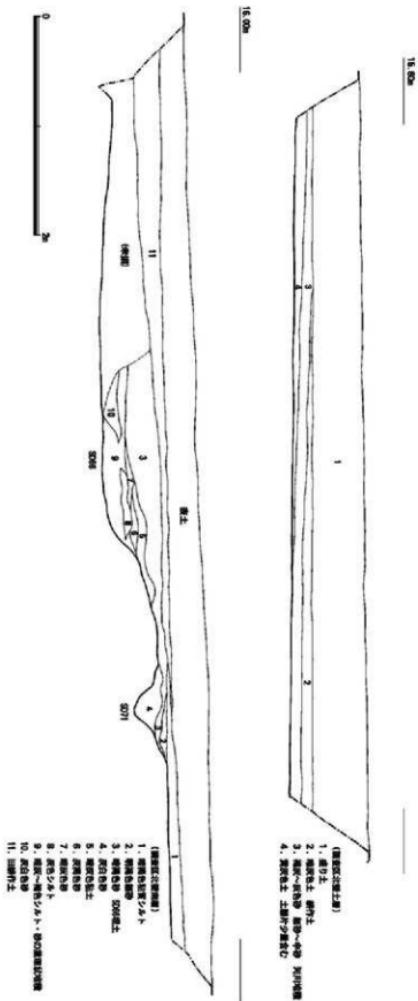


Fig. 4 調査区北壁および南壁土層断面素描図 (1/40)

はこの包含層を切る。包含層が残っていることから、削平は大きくないとみられる。北東隅の柱穴から長径0.5mを測る柱痕跡が検出された。柱穴の埋土は黒褐色シルトに地山の黄褐色シルトがブロック状に混じる状況である。

出土遺物 (Fig.10) いずれも弥生土器壺。1は壺の底部。2は口縁部のいずれも小片である。SB76の時期を決めるのは困難だが、暫定的に弥生後期前半としておく。

SB102 (Fig.7)

2区北端にて検出した。東西2間以上・南北1間以上の建物である。柱穴は長径60~80cmを測る不整円形を呈し、深さ50~80cmを測る。東西方向の柱穴から柱材とみられる木質遺物が出土し、柱間は2.2m前後を測る。柱穴の埋土は暗褐色~黒褐色シルトで、下部は地山の灰色シルトで埋めている。

出土遺物 (Fig.10) 3は弥生土器。  
甕底部の小片である。底径は6.0cm  
に復元できた。P4出土。

(Fig.20) いずれも柱材である。あと1点出土したが腐食が激しく加工痕不明瞭のため図化していない。1はP2出土。丸太材を割らずに用いた木口は3方向から削って整形している。残存長13.8cm・径10.6cmを測る。2はP3出土。端部のみ残存する。丸太材の先端を尖らせるように整形し、断面は概ね3角形となる。杭を転用したものか、または柱抜去の際用いたものが先端だけ折れて残ったものか不明である。残存長17.1cmを測る。

SB201 (Fig 7)

1区由安部で検出した。1間×2間

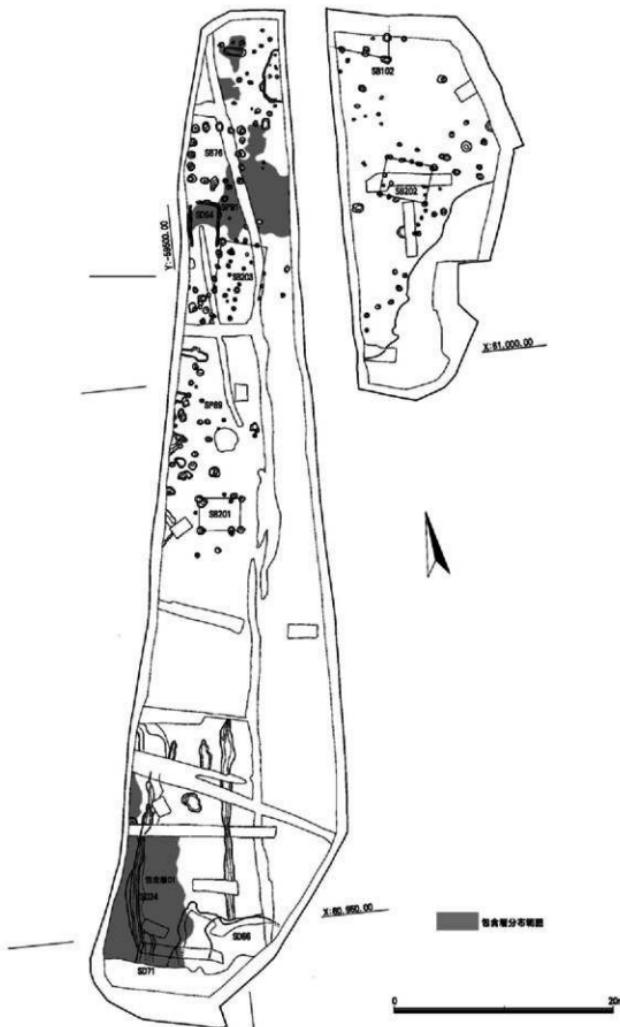


Fig. 5 第4次調査区全体図 (1/400)

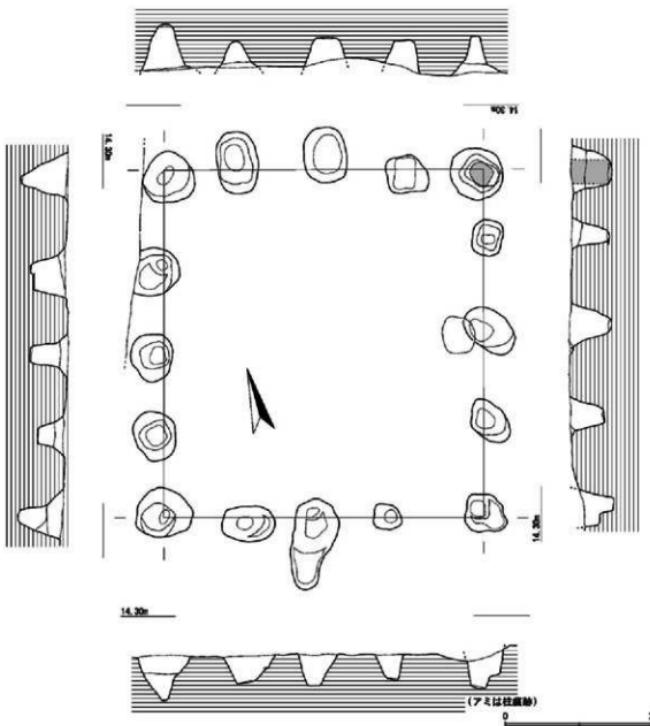


Fig. 6 SB76実測図 (1/60)

の建物である。柱穴が浅く不整で建物ではない可能性もあるがここでは暫定的に掘立柱建物とした。長軸を東西方向に持ち、柱穴は長径30~60cmの不整円形を呈する。深さは10~30cmと浅い。柱間は南北方向で2.4mを測るが、東西の柱筋では東に柱穴が4基偏り、長辺で2.4m、短辺で0.8mを測る。遺物は赤生土器とみられる小片が出土した。

#### SB202 (Fig.8)

2区中央部にて検出した。長軸を東西方向に持つ東西4間、南北2間以上の側柱建物である。柱穴の間隔は不揃いであるべき位置にない柱穴がある。削平が大きいまたは建物ではない可能性もあるがここでは暫定的に掘立柱建物とした。柱穴は長径30~60cmを測る不整円形を呈し、深さ20~50cmを測る。東梁行に当たる柱穴が深い。柱間は中心同士で80cm~90cm、広い箇所で1.6mを測る。

遺物はいずれも小片で器種不明。柱穴の規模からいえば中世まで下ると考えられるが、現場では

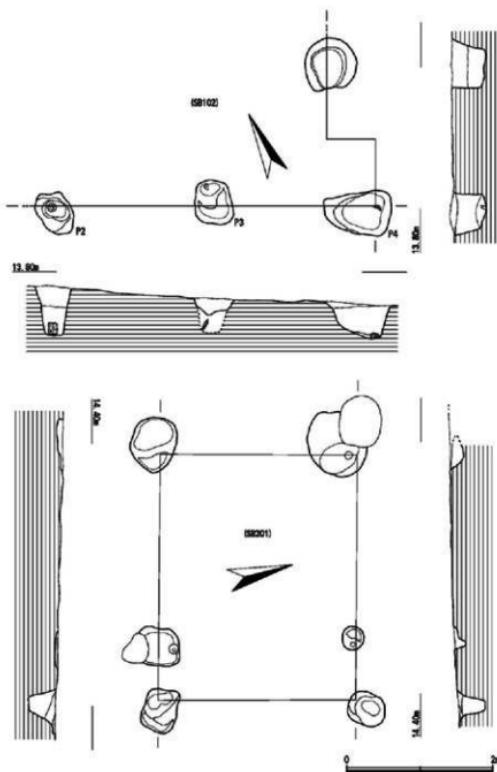


Fig. 7 SB102・201実測図 (1/60)

判断し得なかった。

SB203 (Fig.9)

1区の北部、SB76の南で検出した。遺物包含層を切る。SD94に近接するが切り合はない。長軸を南北方向に持ち、東西推定4間、南北4間の側柱建物である。柱穴の間隔は不揃いで、あるべき位置にない柱穴がある。とりわけ南側の柱筋は柱穴を欠く。削平が大きい、または建物ではない可能性もあるがその他の柱穴の並びからここでは暫定的に掘立柱建物とした。柱穴は長径30~70cmを測る不整円形

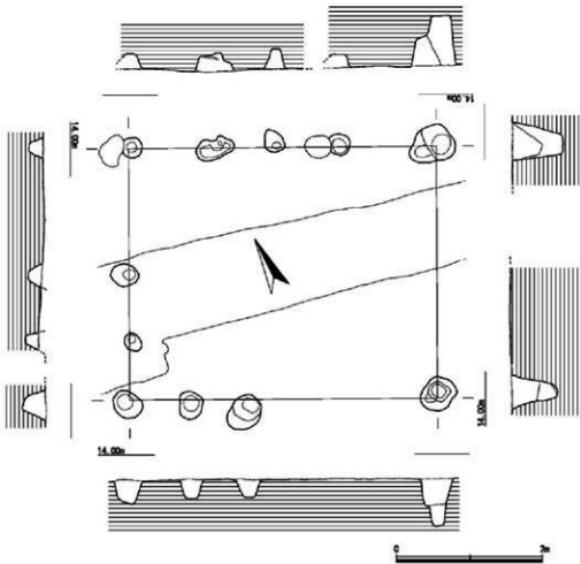


Fig. 8 SB202実測図 (1/60)

を呈し、深さ10~30cmを測る。深いとはいえない。柱間は柱穴の中心同士で70~130cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

遺物はいずれも小片で器種は不明である。柱穴の規模からいえば中世まで下るとも考えられるが、現場では判断し得なかった。

## ②溝 (SD)

### SD24 (Fig.11)

1区北部、丘陵との境界に沿うように検出された。包含層01（後述）に覆われ、包含層の上面では検出できなかった。浅く東に向かって緩く蛇行する溝で、延長13.1mにわたって検出した。断面形は逆台形で底面はほぼフラットである。埋土は包含層01に酷似する暗褐色土の自然堆積で、流水の痕跡は観

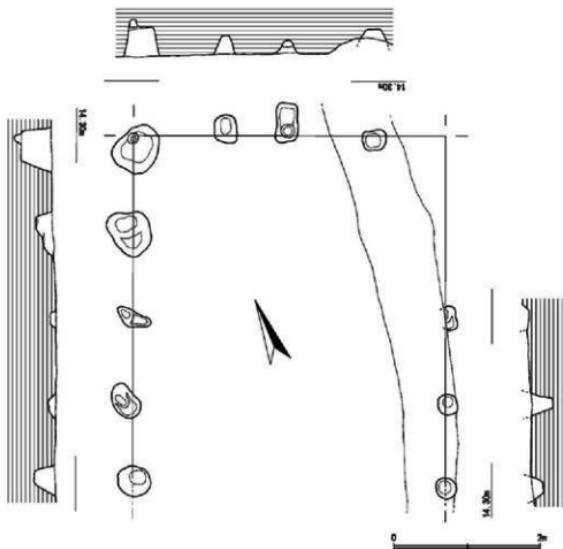


Fig. 9 S8203実測図 (1/60)

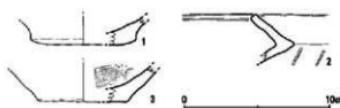


Fig. 10 振立柱建物出土土器実測図 (1/3)

察できなかった。SD24を埋めるように包含層が堆積したとも推測される。

出土遺物 (Fig. 13) 1は須恵器坏身である。1/6個体程度の小片で口径10.4cmに復元される。かえりは器壁が薄く高さ1.2cmを測り、内傾する。内底面は不定方向のナデにて仕上げられ、体部外下部に時計周りの回転ヘラケズリが観察される。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。2は須恵器蓋である。口縁部から体部にかけての小片で口径12.0cmに復元できた。体部内上面は不定方向のナデにて仕上げられ、天井部外縁に時計周りの回転ヘラケズリが観察される。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。3は須恵器高坏である。口縁部と底部を欠く破片で、約1/2個体残存する。坏部は図上や左に傾く。坏部内底面は不定方向のナデにて仕上げられ、外底面には時計回りの回転ヘラケズリが施される。外底面ヘラケズリ後、脚部が貼り付けられている。残存高6.0cmを測る。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。

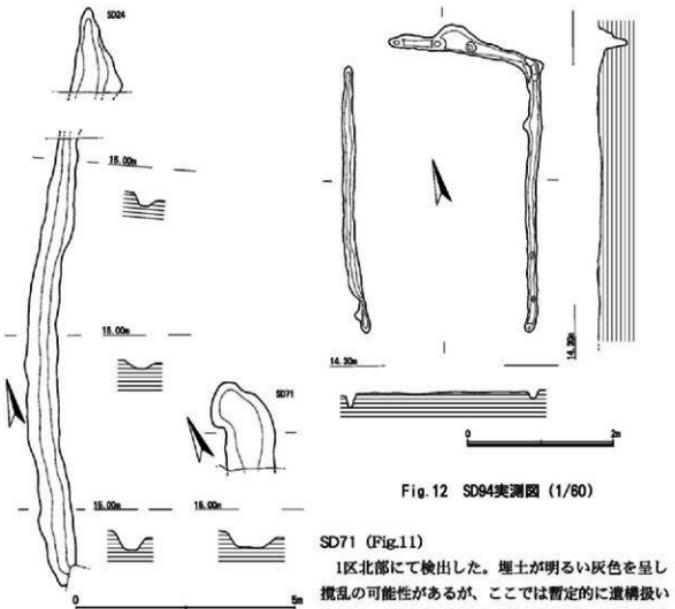


Fig.11 SD24・71実測図 (1/100)

Fig.12 SD94実測図 (1/80)

#### SD71 (Fig.11)

1区北部にて検出した。埋土が明るい灰色を呈し攪乱の可能性があるが、ここでは暫定的に遺構扱いとする。包含層01を切る。南を試掘トレンチに切られ、延長2mのみ検出された。断面は逆台形を呈し、底面はほぼフラットである。

出土遺物 (Fig.13) 4は土師器である。器種は甕で、口縁部から頸部、胴部上端にかけての小片である。口径16.2cmに復元され、残存高6.0cmを測る。頸部はやや器壁厚く外反する。胴部には外面に縦方向のハケ、内面に横方向のヘラケズリ痕が観察される。

胎土は精良で、焼成は良好である。

#### SD94 (Fig.12)

1区北部、SB76の南で検出した。調査区の西端に位置し、丘陵の東麓である。2条に分離し、あわせて南面に開口するコの字状の平面形を呈す。長軸を南北方向に持ち、約3.8×2.4mを測る。溝の断面は逆台形で壁面はしっかりした遺構である。遺物包含層を切って構築され、埋土は暗褐色のシルトである。当初整穴住居の壁溝を考えたが、主柱・炉跡等住居としての要件を満たす施設はない。近接してSP91・SB76等祭祀関連と見られる遺構が検出されており、本遺構も祭祀関連の遺構か。

出土遺物 (Fig.13) 5は弥生土器である。器種は甕で、底部の小片である。外表面はほぼ平底を呈する。底径4.6cmに復元され、残存高1.6cmを測る。胎土は精良で、焼成は良好である。

遺構の時期は根拠に乏しいが、周辺の状況から赤生時代後期前半頃か。

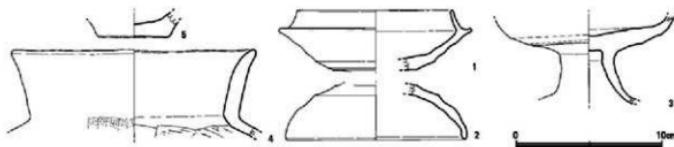


Fig. 13 SD24・71・94出土土器実測図 (1/3)

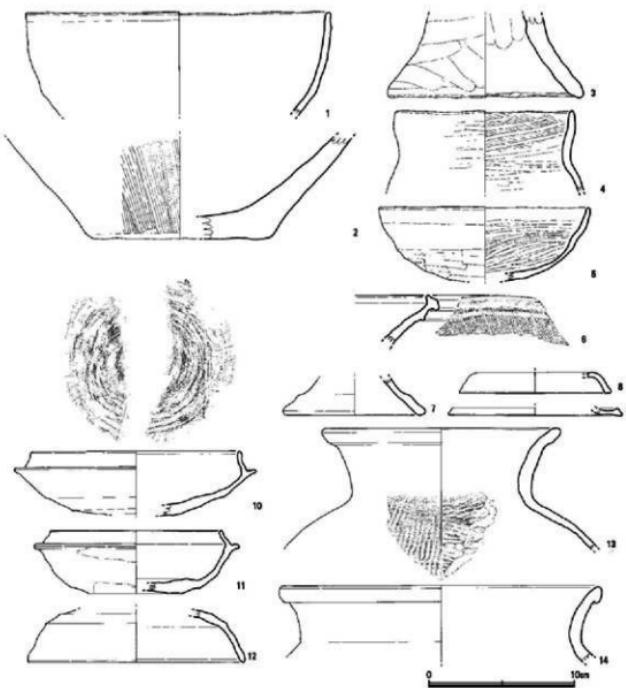


Fig. 14 SD66出土土器実測図 (1/3)

#### SD66 (Fig.5)

I区南端にて検出した。これは本来溝ではなく旧河川というべきものであるが、ここでは便宜上溝として扱う。土層断面をFig.4に示す。検出部分は河川の蛇行部とみられ、壁面は大きく抉られている。

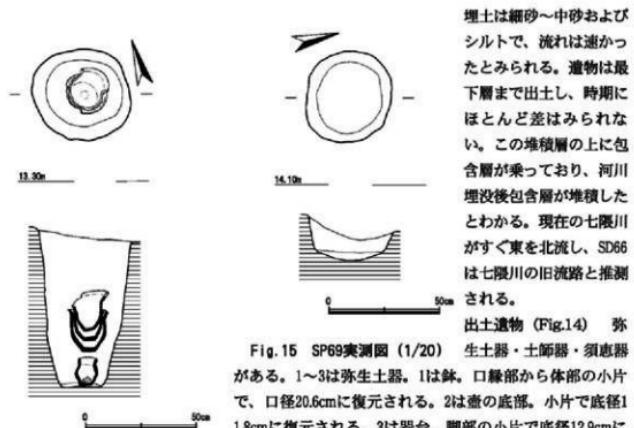


Fig. 16 SP91実測図 (1/20)

4はいわゆる小型丸底盤。口縁部から肩部にかけての小片で口径12.0cmに復元される。内面はハケの後疎なミガキ。5は塊。1/4個体残存し口径14.2cmに復元される。内面は密なヘラミガキ。6~14は須恵器。6は蓋である。口縁部の小片で外面に波状文を有する。7は高杯。脚部の小片で底径9.2cmに復元される。8は高杯脚部または皿の口縁部。小片で高杯脚部とすれば復元底径10.2cm。9は高杯の脚部である。小片で底径11.6cmに復元される。10~11は壺身。10は1/2個体残存し内底面に當て具痕を有する。口径14.2cmに復元される。胎土は橙色を呈しいわゆる土師質須恵器となろうか。11は1/5個体残存する破片で器高4.3cm・口径11.6cmに復元される。体部外面に自然釉がかかる。12は蓋である。小片で口径14.6cmを測る。13~14は蓋である。13は口縁部から肩部にかけての小片で口径21.6cmに復元される。いずれも胎土は精良で施成は良好である。

(Fig.20) 底面から杭が2個体分出土した。先端部のみ残存する。いずれの個体も丸太材を削らずに使用し、手斧状の鋭利な工具で先端を加工している。3は最大径5.0cm・残存長15.9cm、4は最大径4.9cm・残存長12.1cmを測る。

### ③ピット (SP)

#### SP69 (Fig.15)

1区中央部西よりにて検出した。当初の遺構検出面では検出できず、10cm程度遺構面を掘り下げて検出した。径40~45cmのやや不整な円形を呈するピットである。深さは20cm程度で掘り鉢状の断面を呈す。本来はさらに深くなると推測される。

出土遺物 (Fig.17) いずれも赤生土器。1~3、6はピットに投げ込まれた状態で出土した。

1~3はいずれも小形の手捏ね土器。1はほぼ完形で口径6.3cm・器高3.3cmを測る。2は60%程度残存し器高3.6cm・口径6.7cmに復元される。3は80%程度残存し口径6.8cm・器高4.0cmを測る。3は他の2個体に比し器壁は厚手である。4~5は蓋である。底部を1/2残す個体で底径6.6cmに復元される。5は小形

埋土は細砂～中砂およびシルトで、流れは速かつたとみられる。遺物は最下層まで出土し、時期にはほとんど差はみられない。この堆積層の上に包含層が乗っており、河川埋没後包含層が堆積したとわかる。現在の七隈川がすぐ東を北流し、SD66は七隈川の旧流路と推測される。

出土遺物 (Fig.14) 弥

Fig.15 SP69実測図 (1/20) 生土器・土師器・須恵器がある。1~3は赤生土器。1は鉢。口縁部から体部の小片で、口径20.6cmに復元される。2は盃の底部。小片で底径1.8cmに復元される。3は器台。脚部の小片で底径12.9cmに復元される。器壁にはユビナデ痕が残る。4~5は土師器。

4はいわゆる小型丸底盤。口縁部から肩部にかけての小片で口径12.0cmに復元される。内面はハケの後疎なミガキ。

5は塊。1/4個体残存し口径14.2cmに復元される。内面は密なヘラミガキ。

6~14は須恵器。6は蓋である。口縁部の小片で外面に波状文を有する。

7は高杯。脚部の小片で底径9.2cmに復元される。

8は高杯脚部または皿の口縁部。小片で高杯脚部とすれば復元底径10.2cm。

9は高杯の脚部である。小片で底径11.6cmに復元される。

10~11は壺身。10は1/2個体残存し内底面に當て具痕を有する。

口径14.2cmに復元される。

胎土は橙色を呈しいわゆる土師質須恵器となろうか。

11は1/5個体残存する破片で器高4.3cm・口径11.6cmに復元される。

体部外面に自然釉がかかる。

12は蓋である。小片で口径14.6cmを測る。

13~14は蓋である。13は口縁部から肩部にかけての小片で口径21.6cmに復元される。

いずれも胎土は精良で施成は良好である。

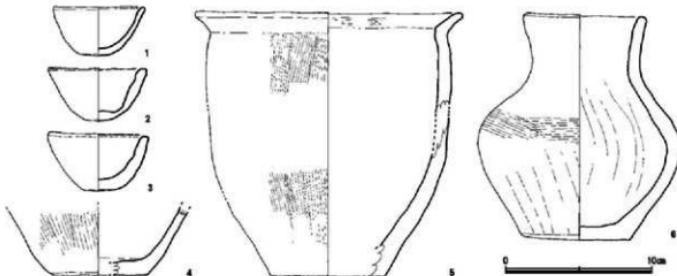


Fig. 17 SP69出土土器実測図 (1/3)

の個体で1/3個体程度残存する破片である。口径18.2cmに復元される。6は小形の壺である。ほぼ完形の個体で口縁部が欠損し、打ち欠きとみられる。作りにはやや荒さがみられる。底部はわずかに丸みを帯び口径8.4cm・器高15.5cm・底径7.2cmを測る。頸部にタキ、胴部上方にヨコハケ、下方に板ナデが施されるなど様々な外面調整が観察される。いずれも胎土は精良で調整は良好である。

#### SP91 (Fig.16)

調査区北部、SB76の南東隅角の柱穴の西70cmで検出した。周辺に堆積する遺物包含層を切って構築されるピットである。径40~45cmを測る不整円形を呈し、深さ70cmを測り断面形は逆台形を呈する。以下に報告する遺物が出土した。土層の観察からは埋土は上層の暗褐色シルト・下層の暗灰色シルトの2層に分かれる。底面に壺形土器を据え、それを地山の土で埋めた後甕・鉢を重ねて据え、一気に埋めたものと推測される。

出土遺物 (Fig.18) いずれも弥生土器。1~4が据え置かれた状態で出土した。いずれも作り・胎土にはやや粗さがみられ、ほぼ完形だが口縁から胴部上部にかけて欠損が観察される。接合する破片は出土せず意図的な打ち欠きとみられる。1・3は小型の甕である。1は胴部にかけて打ち欠きが観察され、胴部のそれは施成後穿孔の可能性もある。口径15.7cm・器高17.5cmを測り、底部はわずかに丸みを帯びる。外面は粗いタテハケ。2は小形の鉢。器形は口縁部のない甕に近い。口縁部の1/2程度を打ち欠いている。口径14.1cm・器高12.9cm・底径5.5cmを測り、底部はわずかに丸みを帯びる。外面はヘラ状の工具でナデ上げている。3は口縁部の過半を打ち欠いており、器高20.0cm・底径7.2cmを測り、口径16.6cmに復元される。外面はタテハケの後下部はヘラ状の工具でナデ上げている。口縁部の一部はSP69から出土しており、SP91はSP69と同時期かまたはSP91がやや先行するとみられる。4は小形の甕である。口縁部に打ち欠きが観察されるが、上記の3点に比し打ち欠きの範囲は狭い。ほぼ完形の個体で、口径8.5cm・器高13.0cm・底径6.2cmを測る。底部はわずかに丸みを帯びる。外面はナデで仕上げられるが、作りは粗い。

以下は埋土に含まれて出土した土器である。5は甕である。底部から胴部にかけての小片で、底径7.7cmに復元される。底部のつくりが他の土器と異なり時期的に遅る可能性がある個体である。6は高坏である。脚部の小片で底径18.6cmに復元される。7は鉢または甕。底部の小片で、底径5.6cmに復元される。8は器台である。1/3個体程度残存する個体で器高18.0cm以上、底径11.6cmに復元される。口縁部は磨滅して消滅する。外面にはユビナデ痕が観察される。

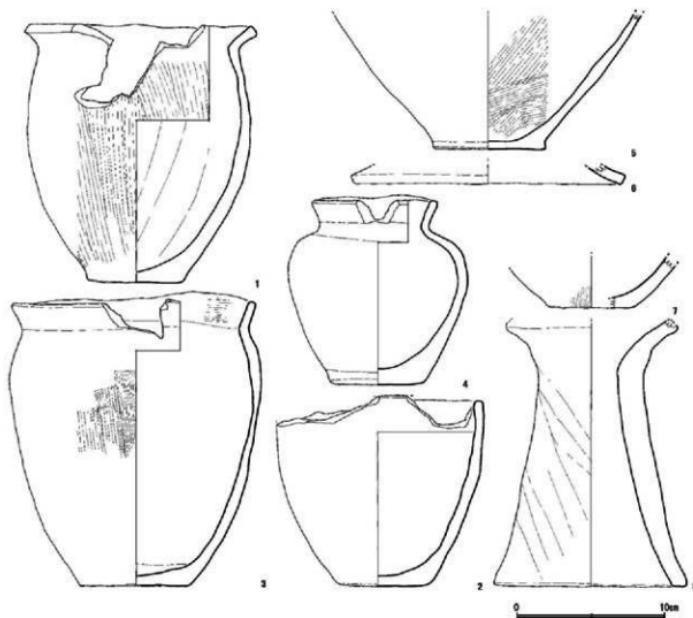


Fig. 18 SP91出土土器実測図 (1/3)

その他のピット出土の遺物 (Fig.19)

1は土師器蓋である。SP17出土で頸部の小片で外面にタタキ痕が観察される。2~6は弥生土器。2・3はSP92出土。2は器台または支脚、上部を欠損し底径9.3cmを測る。3は甌である。口縁部から胴部にかけての小片で口径20.8cmに復元される。頸部に1条突帯を有する。4は器台か。SP34出土。口縁部の小片で外面にタタキ痕、その上から荒いタテハケを施す。5は甌の底部である。SP123出土の小片で底径5.4cmに復元される。6は器台。底部の小片で全体に2次的な被熱がみられる。SP54出土。底径8.6cmに復元される。いずれも胎土は精良で調整は良好である。

④遺物包含層

1区のおもに西よりで遺物包含層が検出された。そのうち南部で鉄津の出土をみた包含層を「包含層01」と区別した。それ以外の包含層は場所は異なるが出土遺物に時期と種類の差がないため区別せずに遺物の取り上げを行った。

包含層01 (Fig.4・5)

1区南部にて検出した。丘陵に接する西側に堆積し、削平のため幅5~6mの帯状となる。堆積状況は

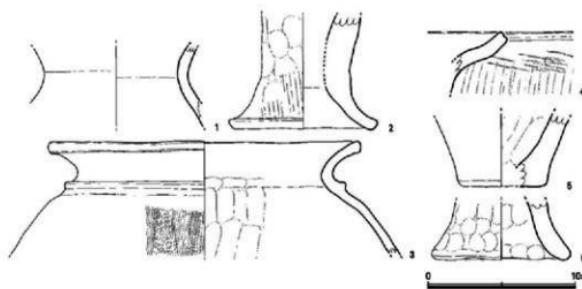


Fig. 19 その他のピット出土土器実測図 (1/3)

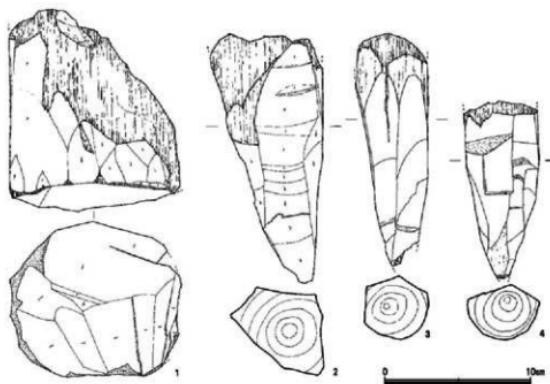


Fig. 20 SB102出土柱材・SD66出土杭実測図 (1/3)

上部が暗褐色粘質シルト、下部が砂礫層となる。上部の遺物は須恵器主体で鉄滓を含み、下部の遺物は弥生土器主体ながら須恵器も含む。鉄滓は含まない。下部の砂礫層は七隈川の旧流路SD66に切られ、上部のシルト層はSD66埋没後の堆積とみられるので時期差がある。遺物からは下部は6世紀末～7世紀初頭頃、上部は8世紀後半から9世紀までの幅が考えられる。おそらく下部の砂礫層は七隈川の溢水で堆積した層で、その後SD66が形成され、埋没後上部のシルト層が堆積したものと推測している。

出土遺物 (Fig.21) 1は綠釉陶器である。皿または鉢の小片。釉は透明感ない淡灰緑色を呈する。2は環状の土製品である。土師質で完形。長径3.5cmを測るドーナツ形を呈する。3は瓶の把手である。ハケのうちユビナデで仕上げている。4は小形の器台か。小片で残存高3.4cmを測る。5～9は須恵器である。5は蓋である。頸部直下の小片で外面に斜め方向の沈線を有する。6は坏身か。小片で外底面に

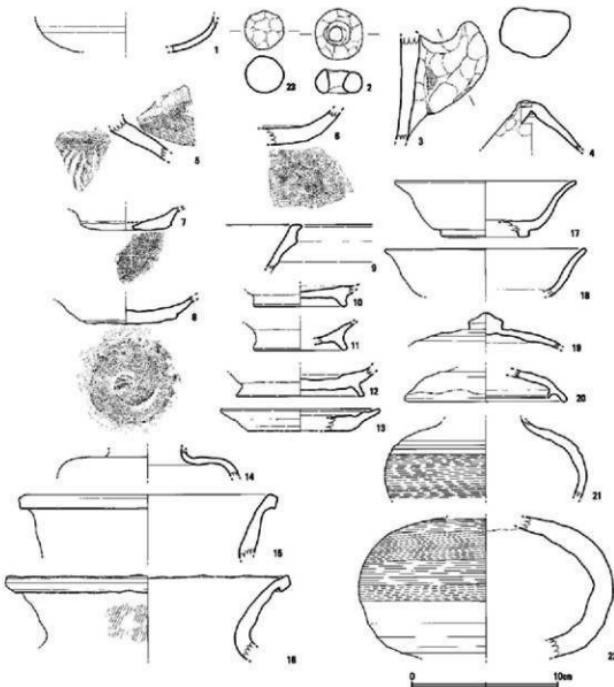


Fig. 21 包含層01出土遺物実測図 (1/3)

ヘラ記号を有する。7は小形の皿か。小片で外底面にヘラ記号を有する。8は坏身である。底部の小片で外底面にヘラ記号を有する。9は甕口縁部の小片である。10・11は土師器塊。いずれも底部の小片である。10は底径6.2cm、11は底径6.2cmに復元されるいすれも器壁の磨擦が著しい。12～22は須恵器。12は高台付き壺である。底部の小片で底径8.6cmに復元される。13は皿である。小片で口径10.7cm、底径7.0cmに復元される。14は小形の壺である。頸部～肩部の小片である。15・16は甕である。いすれも口縁部～頸部の小片。15は口径16.6cmに復元される。16は口唇部に重ね焼きの痕が観察される。復元口径19.1cm。17・18は高台付き壺の小片。17は口径12.2cm・底径4.6cm、18は口径13.6cmに復元される。19・20は蓋である。19は宝珠形つまみを有する小片。20は口径10.8cmに復元され、天井部外面に自然釉がかかる。21は壺または甕とみられる胴部の小片である。上部に2条の凹線、下部にカキメを有する。胴部径13.8cmに復元される。22は蓋である。胴部の小片で上部にカキメを有し、下部は時計回りのヘラ削り。胴部径17.4cmに復元される。

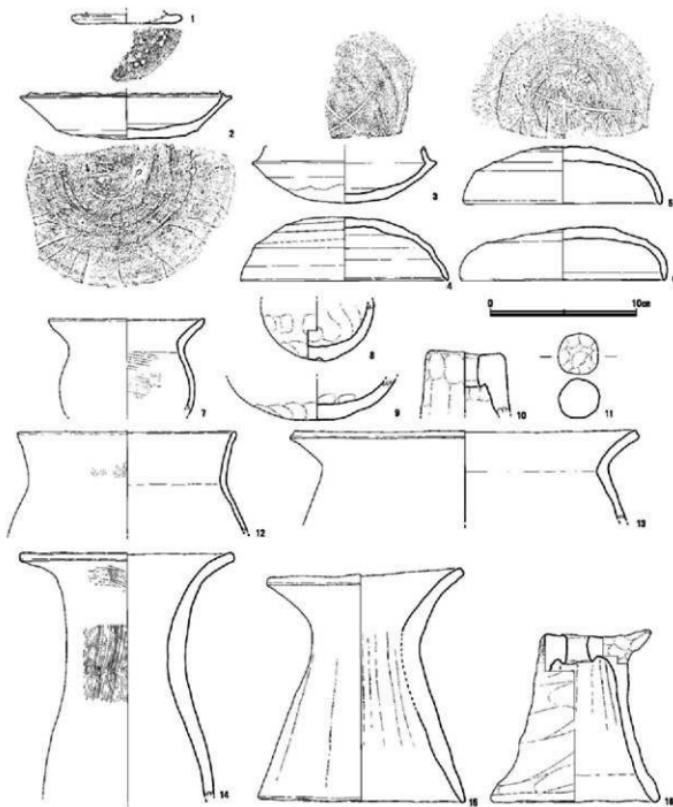


Fig. 22 包含層01下層出土遺物実測図 (1/3)

(Fig.22) 下部の砂岩層出土の遺物である。1~6は須恵器である。1は蓋。底部の小片で多数の孔が観察される。串状の工具で焼成前に刺突し穿孔したものとみられる。2・3は壺身である。2は2/3個体残存し、外底面にヘラ記号を有する。かえりは全て欠損しており、意図的に割り取られた様にも看て取れる。3は小片だが外底面のケズリは他の個体に比し粗雑である。乾いた状態で行ったのか粒子の移動が観察できない。ヘラ記号を内底面に有することもそれに関わるのかもしれない。4~6は蓋である。4は2/3個体残存し口径13.2cmに復元される。天井部外面にヘラ記号を有する。5は80%程度残存する個

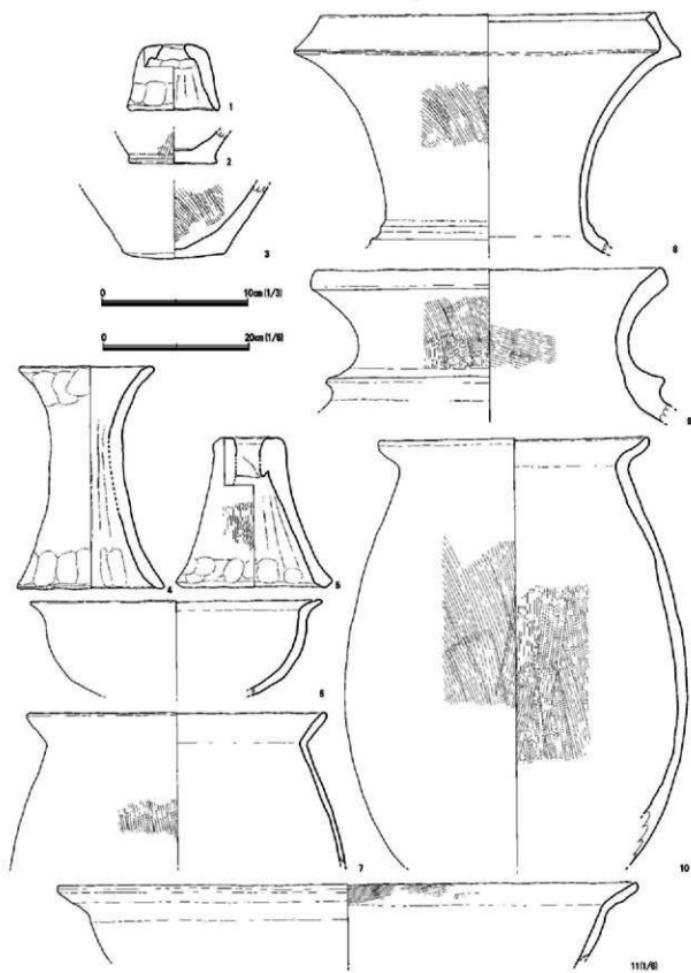


Fig. 23 遺物包含層出土弥生土器実測図 (1/3 - 1/6)

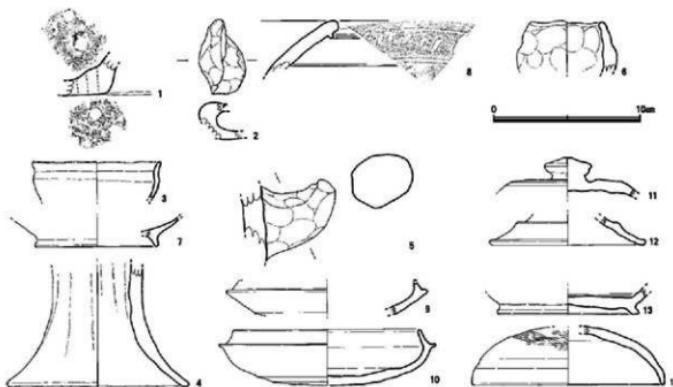


Fig. 24 その他の遺物実測図 (1/3)

体で、口径14.2cm・器高4.3cmを測る。焼成はやや不良で器壁は橙色を呈する。あるいはいわゆる似而非須恵器か。6は1/4個体残存し、口径13.9cmに復元される。器高3.7cmとやや扁平。天井部外面にヘラ状の工具でつけられたと推測される凹線が観察されるが、一般的なヘラ記号とは印象が異なる。

いずれも胎土は精良堅緻で5を除き焼成は良好である。

7~10は弥生土器である。7は小形の壺である。底部を欠損する小片で口径10.4cmに復元される。口径が胴部径より大きい。内面に光沢を有する付着物が観察される。鉄分の可能性も考えられるが表面観察ではわからない。8は手捏ね土器である。ミニチュアの鉢か、あるいはいわゆる瓢箪形土器の頭部の可能性もあるが小片で特定できない。外底面に径6mm程度の焼成前につけられた孔があるが、貫通していない。残存高4.1cm、最大径7.7cmを測る。9は小形の壺または鉢の底部である。小片で器表は磨滅する。残存高2.8cmを測る。10は器台または支脚である。上部のみ残存する個体で上面に孔を有する。焼成前に上面から棒状の工具で穿孔される。残存高4.2cmを測る。11は球形の土製品である。投弾であろう。粘土塊を指押さえ成形している。完形で出土した径2.6cm、重量16.0gを測る。12~16は弥生土器である。12・13は壺である。口縁部から胴部にかけての小片で全体に薄づくりである。口径14.8cmに復元される。13は口縁部から頭部にかけての小片で器壁は磨滅。口径23.3cmに復元される。14・15は器台である。14は2/3個体残存し底部は欠損する個体である。口径14.4cmに復元され、残存高16.7cmを測る。15は90%程度残存する個体で、口径12.9cmに復元され、器高16.1cm・底径13.9cmを測る。器壁は磨滅し調整は不明瞭。16は支脚である。いわゆる畚形器台。2/3個体残存する個体で器高11.0cm・底径11.8cmを測る。上面には孔があり焼成前に外面から棒状の工具で穿孔されているとみられる。上面に接して突起を1箇所指押さえ作り出している。側面はつよいナデの痕が観察されるが上面及び側面上部にタタキ痕が観察され、タタキで成形した後ユピナデで器表を整えたことがわかる。内面上部にはシボリ目が観察される。

上記いずれの弥生土器も胎土は精良で焼成は良好である。

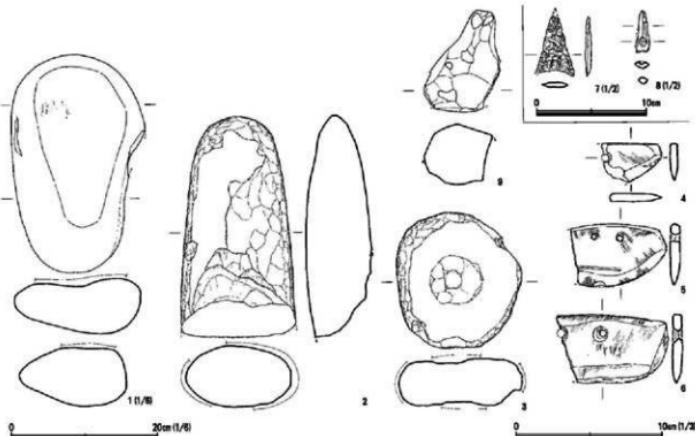


Fig. 25 第4次調査出土石器・石製品・金属器実測図 (1/6・1/3・1/2)

#### 包含層01以外の遺物包含層

1区の主に西側で遺物包含層が検出された。暗褐色のシルト質土でいくつかの部分に分かれて分布している。出土遺物を見る限り時期にはほとんど差はない別々の層というわけではないとみられる。薄く厚さはいずれも10cm程度で、2層以上に分層できる部分はない。遺構、とりわけ掘立柱建物SB76や溝S D94に切られるためこれらよりは先行する堆積であろうが、大きく隔絶する程の差はない。弥生時代後期前半の範疇に収まると考えている。建物・溝を構築するための整地層の可能性も考えたが、地山との境界が漸移的で現場では積極的な根拠は見いだせなかった。

出土遺物 (Fig.23) 全て弥生土器である。1は手捏ね土器である。ミニチュアの器台形か。約1/2個体残存する破片で器高4.5cmを測り、底径6.0cmに復元される。上面に径1.6cm程度の孔があり、焼成前に外側から穿孔している。2・3は甌である。底部のみ残存する破片で底径6.0cm、残存高2.2cmを測る。底面はほぼ平坦である。3は底部から胴部下部にかけての小片で底径7.0cmに復元され、残存高4.3cmを測る。外面は赤く被焼し器表は剥落している。4・5は器台である。4は約80%残存する個体で口径8.6cm・器高15.3cm・底径10.0cmを測る。外面は磨滅し調整は不明瞭である。5は2/3個体残存する破片で、上面の径4.9cm・器高10.3cmを測り、底径9.6cmに復元される。上面に径1.6cm前後を測る孔があり、棒状の工具で焼成前に穿孔したとみられる。6は鉢の小片で、残存高6.5cmを測り、口径19.8cmに復元される。7は甌である。口縁部から胴部上部にかけての小片で、残存高10.4cmを測り、口径20.0cmに復元される。8は甌である。口縁部から頸部にかけて残存する破片で、口径22.8cm・残存高16.4cmを測る。頸部と肩部の境界に2条の突帯を巡らす。9は甌である。口縁部から肩部にかけての小片で、口径22.6cmに復元される。頸部内面に一部剥落が看られ、焼成時に剥落した可能性もある。10は甌である。胴部下部から底部を欠き、約1/6個体残存する。残存高29.2cmを測り、口径18.2cmに復元されるが不正確である。胴部下半は器壁が剥落し煮炊きに用いたとみられる。11は鉢である。口縁部の小片で口径52.

8cmに復元され、非常に大形である。

以上いずれの個体も胎土は精良で焼成は良好である。

#### その他の出土遺物 (Fig.24)

遺構検出面・試掘トレンチ・調査区壁面・擾乱・排出土の遺物である。1は瓶である。排土から出土。底部の小片で3個以上の孔が観察される。外底面から焼成前に穿孔する。2は手捏ねの土製品。土錐かまたは耳皿状となろうか。残存幅3.2cmを測る。3~5は遺構検出面出土。3は土師器塗の小片である。口径8.6cmに復元される。4は器台である。下部の小片で底径12.0cmに復元される。5は瓶の把手である。6は2区壁面出土の手捏ね土器である。小片で口径4.8cmに復元される。7は検出面出土の黒色土器B類である。碗底部の小片で底径8.2cmに復元される。8は擾乱出土の須恵器甕である。口縁部の小片で外面にヘラ状工具による文様がみられる。9・10は坏身である。9は受け部の小片。胎土は土師質でいわゆる似非須恵器か。10は須恵器。1/3個体残存する破片で口径12.6cmに復元される。11~14は須恵器。11は蓋である。11は宝珠形摘みを有する天井部の小片。12は脚部の小片で底径10.2cmに復元される。13は高台付き甕である。底部の小片で底径9.4cmに復元される。14は蓋の小片である。天井部外面の調整はハケをもってなされる。口径12.9cmに復元される。

#### 第4次調査出土の石器・石製品・金属器類 (Fig.25・26)

(Fig.25) 1は包含層01下層出土の台石である。玄武岩質の大礫を用い、右辺の一部を欠くがほぼ完形。中央部が凹み長径30.5cm・最大幅18.6cm、重量6.53kgを測る。2は1区包含層の底面で出土した石斧である。今山系の玄武岩を素材とし刃部を欠損する。基部を含めた縁辺部に打痕が観察される。刃部折損後叩石に転用したものか。残存長15.2cm、重量865.1gを測る。3は包含層01上層出土の叩石である。花崗岩質の円錐を用いた縁辺部と表裏の平面部に打痕が観察される。長径9.3cm、重量426.3gを測る。4~6は石製穂摘具である。いずれの個体も使いべきが顯著である。4は遺物包含層出土。暗灰色を呈する安山岩質の石材を用い、残存長2.7cm・最大幅4.1cm・重量7.9gを測る。5は排土から出土。2/3個体残存する破片で玄武岩質の石材を用いる。2個の紐通し孔を有し上部に紐すれとみられる擦痕が観察される。孔は錐状の工具で両面から穿孔される。残存長6.6cm・幅4.3cm・重量28.1gを測る。6は遺物包含層出土。1/2個体強残存する破片で玄武岩質の石材を用いる。2個の紐通し孔を有し上部に紐すれとみられる擦痕が観察される。孔は錐状の工具で両面から穿孔される。残存長7.7cm・幅4.7cm・重量34.6gを測る。7は包含層01下層出土の打製石礫である。四基式の三角錐で黒曜石の剥片を素材とする。8は擾乱129出土の金属製品である。銅鎌にも見えるが用途は不明である。中央に穂を有し径4mm前後の凹みがみられる。器長1.9cm・重量1.1gを測る。鉗はほとんどみられない。9は石錐未成品である。遺物包含層出土で下部に欠損あり。明灰色の砂岩質の石材を用い、器長7.0cm・重量154.9gを測る。

(Fig.26) SX109出土したがこれは遺構ではなく、旧七隈川が溢水したとき地山の凹みに堆積物がたまたまものとみられる。1はいわゆる舟形削片である。欠損部分が大きく全体に風化し、残りはよくない。甲板部に上下方向からの剥離が観察され、底縁は内湾する。器長3.8cm・重量3.5gを測る。

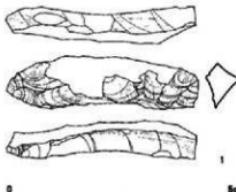


Fig. 26 SX109出土舟形削片実測図 (1/1)

### 第3章 第4次調査のまとめ

第4次調査では、掘立柱建物5棟・溝3条・旧河川・土器埋納ビット2・古代および弥生時代後期の遺物包含層を検出した。丘陵の麓でありなおかつ河川の氾濫原という遺跡の立地としては条件がよくない地点だったが当初予想された以上の遺構に恵まれた。以下、調査を進めていく中で得られた所見を簡単にまとめてみたい。

掘立柱建物は5棟検出した。うちSB201～203は建物としての決め手に欠け、紙上では暫定的に掘立柱建物としたものである。ここでは確実に掘立柱建物またはその一部と推測されるSB76・SB102について話を絞りたい。いずれも時期は弥生時代後期前半頃と推測している。SB76は4間×4間の側柱建物である。平面形はやや南北に長いがほぼ正方形に近い。推定される柱筋を結んで床面積を計算すると約21.6m<sup>2</sup>となる。類例の少ない形式の建物である。SB102は南および東側柱筋の一部を検出したもので、一部の柱穴から柱材が出土した。平面形は不明だが柱穴の規模はSB76に近い。

土器埋納ビットは2基検出された。時期は出土遺物から2基とも弥生時代後期前半の範疇に収まるとみられる。とりわけSP91は口縁部など一部を意図的に打ち欠いた土器を明らかに重ねて埋めている状況であった。その土器も日常使用するものとは明らかに作りが異なり、胎土も砂粒を多く含み調整も粗雑な、いわばいい加減な作りの土器である。煮炊きなど使用に供された痕跡はない。

溝は、SB76の南にSD94が検出されている。この溝はL字形の溝とT字形の溝に分かれ、2条でコの字形の平面形を形作っている。幅は狭いが深く、機能は不明だがしっかりした遺構である。

容易に水をかぶる可能性が高く湿気に満ちた氾濫原に掘立柱建物を構築し、土器をわざわざ重ねて深いビットに埋める等、これらの遺構の状況から今まで推測されるのは「祭祀」であろう。とりわけ掘立柱建物SB76は特殊な形態・立地から推して住居や倉庫ではなく、「祭殿」であった可能性が考えられる。この建物で日常的に人間が生活したりものを保管するには周辺の環境が悪く、その用途ならばすぐ西隣にある丘陵の方方がよほど条件に恵まれているのである。これを祭殿とすれば、ビットに祭祀用の土器を埋納し、マツリを行っていた状況も見えてくる。SB102の平面形は不明であるが、柱穴の規模はSB76と同様で、SB102が掘立柱建物でSB76同様祭殿ならば祭殿が複数あった、または建て替えられた可能性も出てくる。溝SD94の用途は今のところ不明だが、いずれにせよすくなくとも弥生時代後期前半頃の調査地周辺は人間が居住するエリアではなく、祭祀のための場であったのではないか、と考えて遺物包含層の時期は大きく2時期に分かれる。古代（3世紀後半～9世紀頃）と弥生時代後期前半である。ここでは古代の包含層に絞って所見を述べたい。

古代の包含層にはコンテナケース1/3程度ではあるが鉄滓が含まれていた。これらの鉄滓は小さく破碎され、溶融した炉壁が付着する個体が多く、少なくともそれらについては精錬滓とみられる。丘陵西側に熊ソイ池なるため池が存在し、その東岸から鉄滓が採集されているほか、飯倉A遺跡第2次調査では炉跡とその裏い屋になる可能性のある掘立柱建物、精錬滓が検出されている。これらのことから8世紀後半から9世紀にかけての時期に飯倉丘陵一帯で製鉄が行われていたと推測される。鉄素材から製品を作る小鍛冶では精錬滓は生まれないからである。とすれば丘陵上に製鉄炉が存在するはずだが、今回の調査では検出されなかった。丘陵尾根が大きく削平されていることが原因であろう。



1. 1区南部全景（南より）



2. 1区南部全景（北より）



3. 1区包含層掘り下げ後全景（西より）

PL. 2



1. SD24 (北より)



2. SD66 (北より)



3. SD66南壁土層 (北より)



1. 1区北部全景（南より）

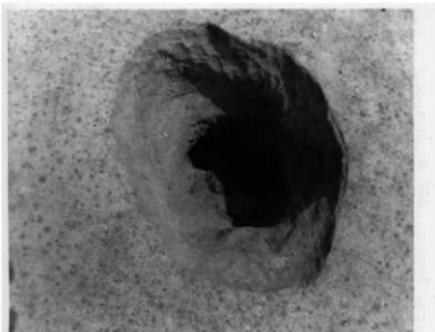


2. 2区北部全景（南より）



3. SB102（南より）

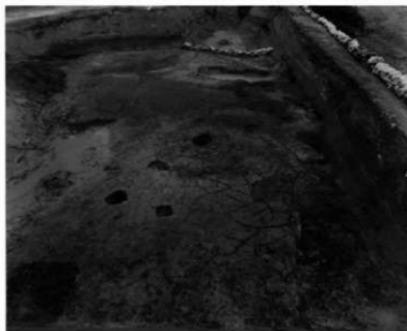
PL. 4



1. SB102P-2 柱材出土状況（南より）



2. 2区南部全景（北より）



3. 2区南部ピット検出状況（北より）

## 第4章 第5次調査の記録

### 1. 調査概要

第5次調査区は、飯倉F遺跡が位置する丘陵の北端部に位置する。

この調査で検出された遺構は、掘立柱建物9棟・竪穴住居4軒・溝2条・土壙5基・テラス状の削平部・炉跡1・ピット多数である。テラス状の削平部は丘陵の北斜面に検出したが、テラス部に遺構は検出されず、テラスの役割を現場で確認することはできなかった。掘立柱建物はテラスの堆積土を切って建てられ、古墳時代から古代にかけての建物と思われる。平面の形態は複数あり、時期に差があると推測される。竪穴住居はベッドを有し炉跡を挟んで2基の主穴を持つ。弥生後期後半から終末にかけての住居か、溝は居住址を切る。細く流水の跡は見られない。土壙は中央に杭の痕跡を有するものがある。遺物はほとんどなく落とし穴と推測される。出土遺物は、テラス状の削平部の堆積土からまと



Fig. 27 第5次調査区位置図 (1/1,000)

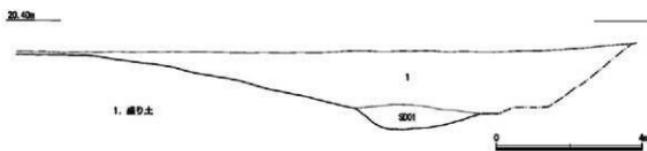


Fig. 28 調査区西壁土層断面実測図 (1/120)



Fig. 29 第5次調査区全体図 (1/200)

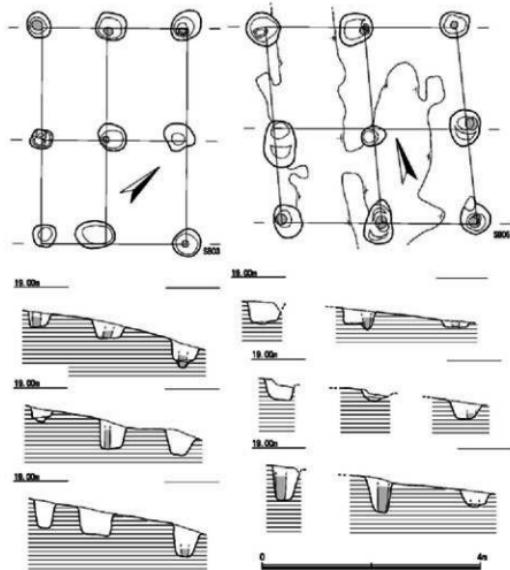


Fig. 30 SB03・05実測図 (1/80)

また量の弥生土器が出土したほか、鉄製勧先が3点出土した。掘立柱建物等の遺構からは弥生土器・須恵器が出土したが、細片で量も少なく時期の根拠には乏しい。

## 2. 遺構と遺物

### ①掘立柱建物 (SB)

#### SB03 (Fig.30)

調査区北部にて検出した2×2間の総柱建物である。長軸を東西方向にもつが、これは方位より地形に合わせた結果と推測される。柱穴は径50~70cmを測る不整円形をなし、深さ50~70cmを測る。柱痕跡は5基の柱穴から検出され、柱間は1.3~1.4mを測る。埋土は暗褐色粘質土だが、一部地山の黄白色粘質土で埋めた柱穴もある。

遺物は弥生土器とみられる細片が出土したが、器種を特定できる破片はない。

#### SB05 (Fig.30)

調査区東部にて検出した。2×2間の総柱建物である。平面プランはほぼ正方形だが、南北軸はやや西に偏し全体に平行四辺形となる。柱穴は径60~80cmを測る不整円形をなし、深さ30~60cmを測る。中央の柱穴のみ長径40cm・深さ8cmと規模が小さい。柱痕跡は6基の柱穴から検出され、柱間は1.4~1.7mを測る。埋土は暗褐色粘質土だが、一部地山の黄白色粘質土で埋めた柱穴もある。

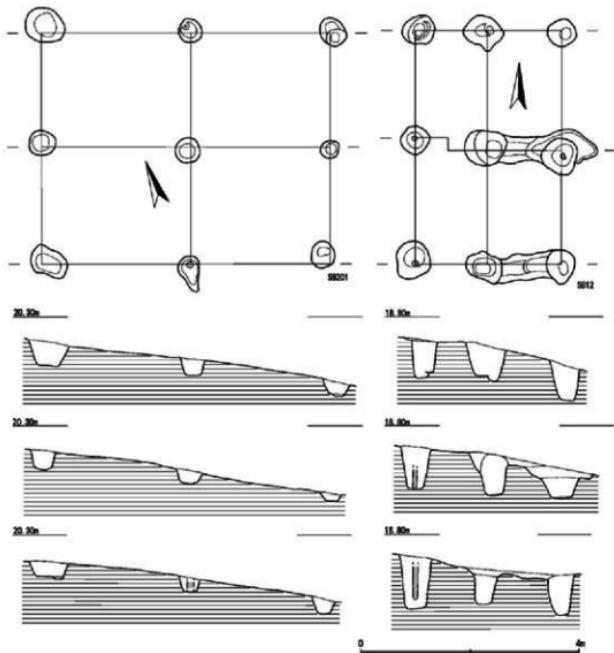


Fig. 31 SB12・201実測図 (1/80)

遺物は複合口縁壺など弥生土器が出土したが、いずれも細片である。

#### SB12 (Fig.31)

調査区北東部にて検出した。長軸を南北方向にもつ $2\times 2$ 間の長方形の総柱建物である。柱穴は長径50~70cmを測る不整円形を呈するが、南東の4基は一旦溝状の掘り込みを構築した後それを埋め、改めて柱穴を設けている。溝状の掘り込みはいわゆる市振り地業と推測される。柱穴の深さは何れも70cm前後を測るが、西側柱筋中央の柱穴のみ1mを測る。埋土は暗灰色粘質土で底面まではば均一な堆積であった。

遺物は弥生土器とみられる細片が出土したが、器種を特定できる破片はない。

#### SB202 (Fig.32)

調査区北西部にて検出した建物である。どちらの方向にも展開しないので $1\times 1$ 間に復元した。堅穴住居の主柱穴の可能性もあるが丘陵端部での検出で住居址を構築できる所ではない。SB03に切られる。柱穴は長径50~60cmを測る不整な方形で、深さ20~30cmを測り他の建物に比し浅い。埋土は地山の黄

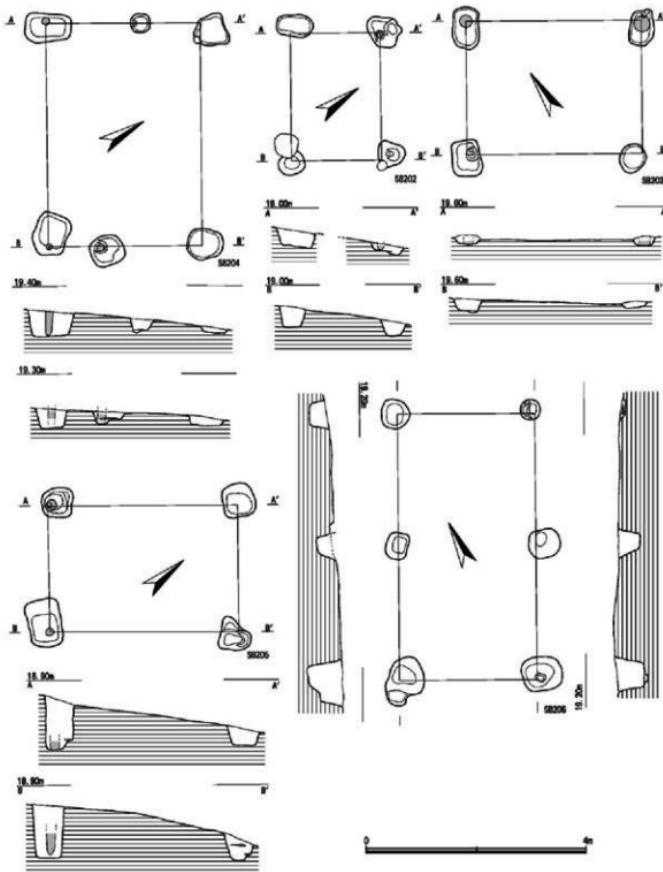


Fig. 32 SB202・203・204・205・206実測図 (1/80)

色粘質土を含む暗褐色土である。

遺物は弥生土器とみられる細片が出土したが、器種を特定できる破片はない。

SB203 (Fig.32)

調査区北西部で検出した。長方形プランで長軸を東西方向にもつ1×1間の建物である。柱穴は不整

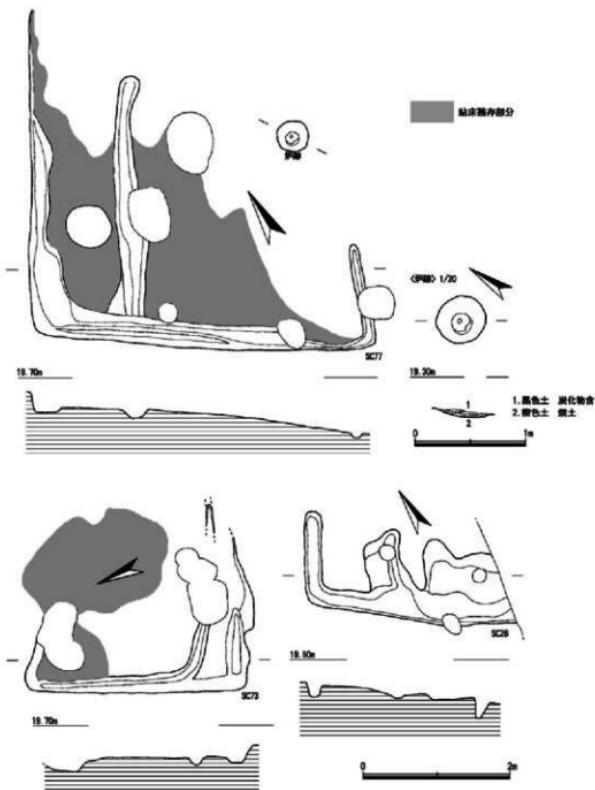


Fig. 33 SC28・73・77実測図 (1/60)

な方形または円形を呈し長径50~80cmを測るが、深さはいずれも10~20cm前後と浅い。柱痕跡は北側の柱穴から検出され、柱間は約3.2mを測る。埋土は地山の黄白色粘質土をブロック状に含む暗褐色土である。遺物は出土しなかった。

#### SB204 (Fig.32)

調査区北西部にて検出した1×1間の建物である。東西柱筋中央の柱穴が柱筋に乗るが不揃いなのでここでは暫定的に建物に含めずに報告する。長軸を東西方向にもつ長方形プランを呈する。柱穴は長径60~80cmの隅丸方形または不整円形を呈する。深さは40~10cmで削平のためか北側の柱穴が浅い。

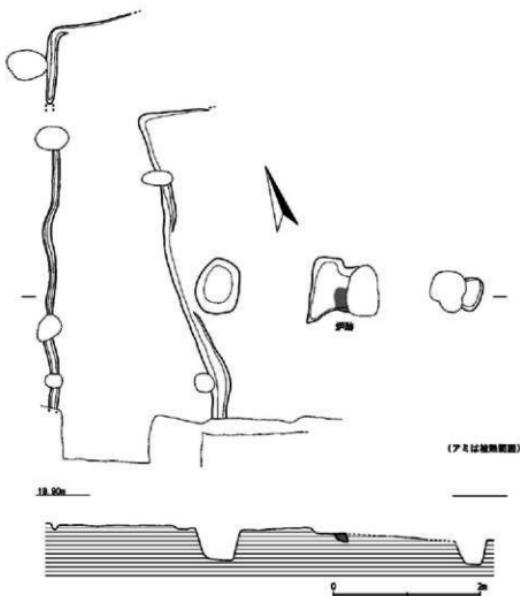


Fig. 34 SC85実測図 (1/60)

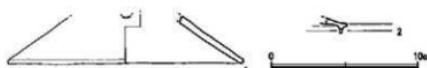


Fig. 35 SC28・73出土土器実測図 (1/3)



Fig. 36 SC77出土土器実測図 (1/3)

柱間は南側柱筋で4.2mを測る。

遺物は弥生土器とみられる細片が出土したが、器種を特定できる破片はない。

SB205 (Fig.32)

調査区北部中央付近にて検出した。長方形プランを有し長軸を南北方向にもつ1×1間の建物である。柱穴は不整な方形を呈し長径60~80cmを測る。深さは南側柱穴が深く90cm~1m、北側柱穴は45~60cmを測る。柱痕跡は南側柱穴に検出され、柱間は約2.1mを測る。埋土は地山の黄白色~黄褐色粘質土で

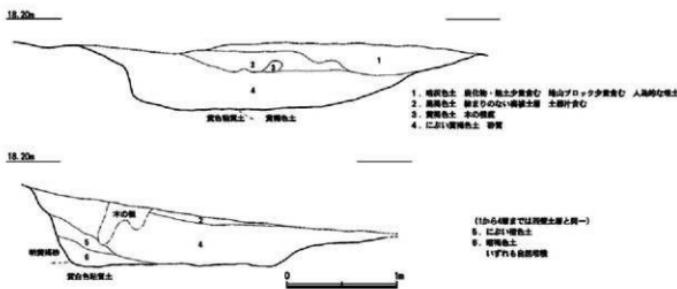


Fig. 37 SD01 土層断面実測図 (1/40)

あった。

遺物は弥生土器とみられる細片が出土したが、器種を特定できる破片はない。

SB206 (Fig.32)

調査区北東部で検出した。長方形プランで長軸を南北方向にもつ1×2間の建物である。柱穴は不整な円形または方形を呈し長径40~90cmと規模に幅がある。深さは20~50cmで北側の柱穴ほど深い傾向にある。柱痕跡は検出されなかった。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。

遺物は甕底部をはじめ弥生土器とみられる細片が出土した。

②堅穴住居 (SC)

SC28 (Fig.33)

調査区北部・SB204の南で検出した。溝状の造構だが東部が広がりを有するため住居址の壁溝とした。東側を攪乱に切られ、西端で鈍角に屈曲し北に延び、中央付近から北に溝が分岐する。方形の住居址となろう。切り合いは確認できず一体の溝と判断した。東西2.9m・南北1.3m残存する。主柱穴・炉跡などは特定できなかった。

出土遺物 (Fig.35) 1は弥生土器高杯である。脚部の小片で底径16.1cmに復元される。

SC73 (Fig.33)

調査区南東部にて検出した。削平のためか東側を失うが方形の住居址となろう。南北約3.0mを測り、東西の埋土残存範囲は2.5mである。深さは残りのよい部分でも10cm前後である。西と南に壁溝を有し南で1条分岐する。主柱穴・炉跡などは特定できなかった。

出土遺物 (Fig.35) 2は須恵器である。蓋の小片でかえりの先端は失われる。残存高0.9cmを測る。

SC77 (Fig.33)

調査区中央部にて検出した住居址である。削平のためか北東部を失うが、他の部分から東西4.5m・南北4.3mの方形住居と推測される。壁溝は南・東・西壁の2/3に検出された。西壁に並行して1条溝が検出された。現場ではわざかに埋土の差がみられたが他の住居址で片側に壁溝が分岐する例があり、一体の溝になるとみられる。底面には貼り床が検出された。地山の黄褐色土を用い厚い箇所で4cmを測る。底面までの深さは残りのよい部分で検出面から20cm前後である。

北東部で炉跡を1基検出した。ここでは暫定的にSC77に付属する炉として報告する。長径45cmを測る

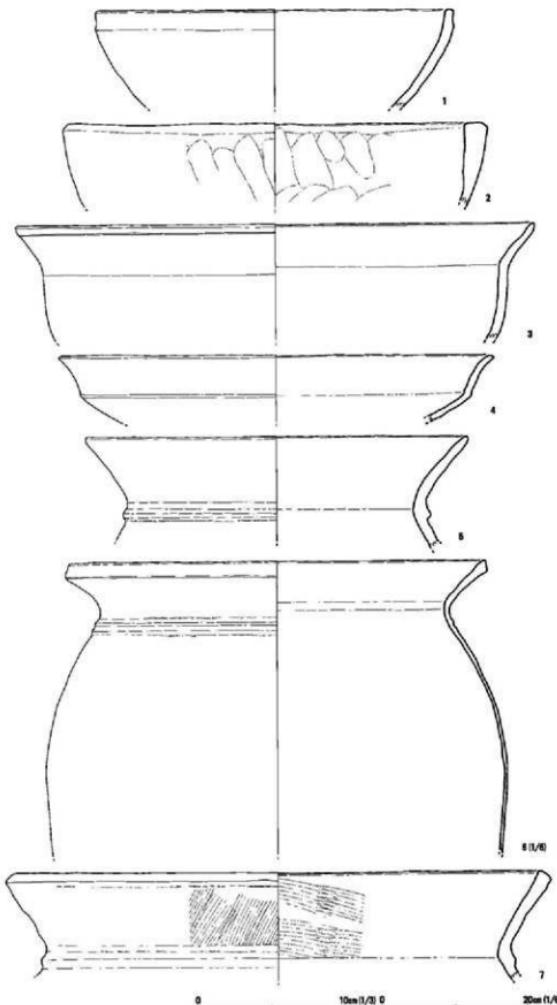


Fig. 38 SD01出土土器実測図① (1/3・1/6)

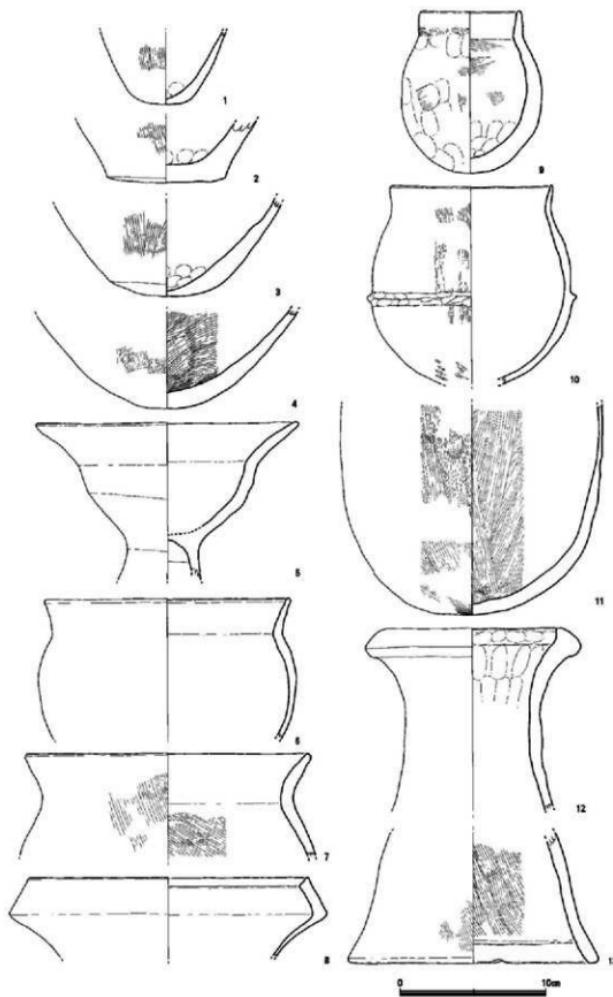


Fig. 39 SD01出土土器実測図② (1/3)

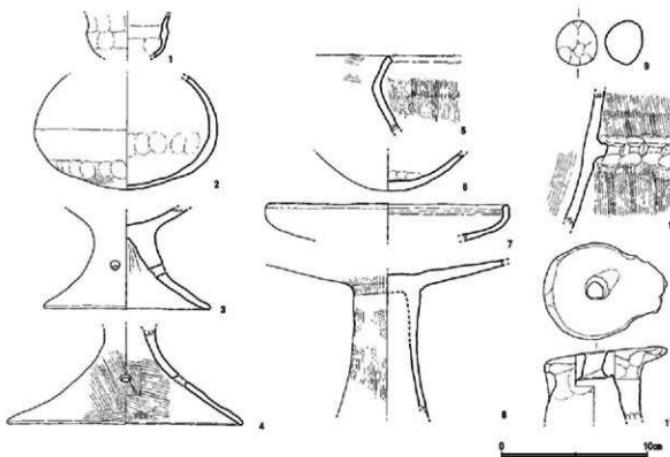


Fig. 40 SD01出土土器実測図③ (1/3)

楕円形を呈し、深さ5cmと非常に浅い。土層断面をFig.33に示す。2層に分かれ上層は炭化物を含む黒色土層、下層は橙色の焼土層であった。

出土遺物 (Fig.36) 1は弥生土器である。高坏の坏部で上部を欠損する小片である。残存高3.7cmを測る。

#### SC85 (Fig.34)

調査区南部で検出した。削平が顕著で西側の壁溝・主柱穴・炉跡のみ残存していた。南側を擾乱とSD111に切られる。東西6.0m以上・南北5.6m以上の方形住居と推測される。西側に2条へ機構が検出され、外側の溝は北面に延びる。内側の溝の東壁は低く中央部は検出できなかった。北面で東に屈曲し少なくとも西及び北面にベッド状造構を有していたとも考えられる。主柱穴とみられる柱穴は2基、炉跡を挟むように検出された。長径50~75cmを測る不整円形を呈し、深さ20~25cmを測る。貼り床は検出できなかった。中央部に炉跡を検出した。ピットに切られるが底面の地山が被熱した部分が長径40cmの楕円形に残存している。

遺物は弥生土器とみられる細片が出土した。

#### ③溝 (SD)

##### SD01 (Fig.29・37)

調査区北端にて検出した。丘陵の北斜面を地形に沿って検出された。この造構の南壁はほぼ垂直に立ち上がり、人為的に掘り下げたものと推測される。北側は南壁に比し立ち上がりの角度がゆるく明瞭ではない。テラス状の段落ちとなる可能性もある。現場では北壁の比高差3mという調査区の割合もありはっきり溝と特定しえなかつた。ここでは暫定的に溝として報告する。

土層断面をFig.37に示す。底面の地山は中ほどで黄白色粘質土から明黄褐色土に変化する。下部の

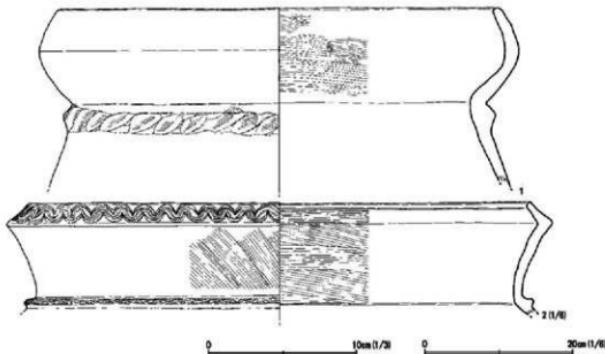


Fig. 41 SD01出土土器実測図④ (1/3・1/6)

第4層との境界が明瞭で遺物の出土がみられないため現場ではこれが底面と判断した。第4層はほぼ均一な埋土で南から徐々に埋まりつつあったSD01を人為的に一気に埋めた土と推測される。この層の上面で後述する炉跡SR02が検出された。上層の第2層はいわゆる腐植土で自然堆積である。第4層との境界は漸移的で第4層堆積後長期間にわたり放置されていた状況が推測される。第1層は人為的な埋め土とみられ、わずかに残っていた凹みを完全に埋めたものと推測される。

#### 出土遺物 (Fig.38~42)

主に第2層・第4層から出土した。調査時の不手際から遺物が混じってしまったため、ここでは層でわけず一括して報告する。土器の時期は弥生時代後期後半～終末頃とみられ他の時期の遺物はほとんど混じらない。SD01埋没の時期を示すものと考えられる。第4次調査の項でも述べたが胎土は黄白色～明黄褐色を呈するものが多く、飯倉跡群の弥生土器の特色といえるかもしれない。

(Fig.38)　すべて弥生土器である。1~3は鉢である。口縁部から胴部にかけての小片で口径24.0cmに復元され、残存高6.7cmを測る。胴部外面に一部タテハケが観察される。2は口縁部の小片である。口径29.1cmに復元されるが推定値である。内外両面ともユビナデ・オサエにて調整される。残存高5.7cmを測る。3は大形の個体である。口縁部から胴部にかけての小片で口径35.2cmに復元されるが推定値である。口唇部はやや肥厚し直下にわずかな段を有する。残存高7.9cmを測る。器壁は完全に剥落し調整は不明である。4は高杯である。杯部の口縁部から胴部にかけての小片で口径30.0cmに復元される。口縁部は外反し周辺はナデられるが下部は磨滅し調整は不明である。残存高4.6cmを測る。5~7は甕である。口縁部から胴部にかけての小片で口径26.3cmに復元される。頸部と胴部の境界に突帯を1条巡らし、断面形はいびつな台形を呈する。器壁は磨滅し調整は不明である。残存高7.7cmを測る。6は口縁部から胴部にかけて残存する破片で口縁部は完存する。口径56.8cm・残存高41.0cmを測る大形の個体である。全体に薄造りでとりわけ胴部にその傾向が顕著である。頸部直下に2条の突帯を有しその断面形は三角形を呈する。器壁は内外両面とも磨滅し調整は不明である。7は口縁部から頸部にかけての小片で口径36.0cmに復元される。頸部に1条突帯を巡らしその断面形は三角形を呈する。断面には内傾する粘土紐の接合痕が観察される。

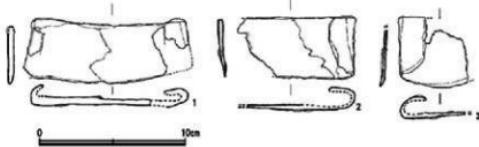


Fig. 42 SD01出土鉄製品実測図 (1/3)

(Fig.39) 全て弥生土器である。1~4は甕の底部である。1は小形の個体の小片で底面は丸みを帯びる。底径4.8cmに復元され、残存高5.0cmを測る。器壁は磨滅するが胴部外面にタテハケが観察される。2は底部および胴部下部が残存する破片で底面はわずかに丸みを帯びる。底径8.0cm・残存高4.2cmを測る。内底面はユビオサエ、胴部外面はタテハケにて調整される。3は底部から胴部下部にかけての小片である。底面は丸底に近い。底径7.8cmに復元され、残存高6.7cmを測る。内底面はユビオサエ、胴部外面はタテハケにて調整される。4は底部から胴部下部にかけて残存する破片である。底面はほぼ丸底となる。残存高6.7cmを測る。特に外面は磨滅し調整は不明瞭だが、内面は密なハケ、胴部外面はタテハケにて調整される。5は脚付きの鉢または高坏である。坏部及び脚部の上部が残存する破片だがフォームが直で左右非対称な形となってそれが表れる。坏部口径17.7cmに復元され、残存高10.7cmを測る。器壁は内外両面とも磨滅し調整は不明。脚部内面に接合痕が観察される。6は甕である。小型の個体の小片で口径16.6cmに復元される。脚部は丸く口唇部はやや肥厚する。器壁は磨滅し調整は不明瞭である。残存高9.6cmを測る。7は甕である。口縁部から胴部にかけての小片で口径19.2cmに復元される。外面および胴部内面はハケにて調整される。外面のハケのが内面のそれより目が粗い。残存高7.1cmを測る。8は甕である。断面の字形を呈する二重口縁甕で、口縁部の小片である。口径19.0cmに復元され、残存高5.4cmを測る。断面には粘土紐の接合痕が観察される。口縁部から頸部に向かって器壁は薄く作られる。器表は磨滅し調整は不明瞭である。9は小形の甕でミニチュアといつてもよい個体である。約80%残存し、口径6.6cmに復元され、器高11.1cm・胴部径8.6cmを測る。内面は上部が疊なハケ、下部がユビオサエ、外面はユビオサエのちタテハケにて調整される。器壁は分厚く焼成はやや不良で全体に作りは粗い。10は甕である。これも小形で約40%残存する破片で口径11.0cmに復元され、残存高13.6cmを測る。脚台が付く可能性もある。内外両面とも磨滅し調整は不明瞭だが外面にはハケ、底部付近にはタタキ痕が観察される。胴部中ほどに突帯が1条巡る。ハケのち粘土紐を上下方向に指で押さえて成形される。11は甕である。胴部下半～底部にかけての破片で約40%残存する。胴部径18.0cmに復元され、残存高14.4cmを測る。外面の器壁は剥落するがタテハケが観察され、内面は黒色を呈し密なハケにて調整される。内底面にはユビオサエ痕が観察される。12は器台である。底部を欠く小片で、口縁部は内側に向けて肥厚する。口径11.8cmに復元され、残存高12.5cmを測る。器壁は内外両面とも磨滅し調整は不明瞭だが、内面にはユビオサエ痕が観察される。13は器台である。上部を欠損する小片で口径16.0cmに復元され、残存高9.0cmを測る。特に外面は磨滅するが内外両面にタテハケが観察される。底部内面に粘土紐の接合痕が観察される。底部にへこみがみられるが、製作時にひも状の凸部に乗ったものか。

上記9番の甕を除き何れの個体も胎土は精良で焼成は良好である。

(Fig.40) 1は手捏ね土器である。口唇部と底部を欠損する小片で残存高3.0cmを測る。口縁部内面を除きオサエ痕が観察される。2~8は弥生土器である。2は甕である。長頸甕となろうか。胴部のみ残存する破片で残存高7.7cmを測り、胴部径12.7cmに復元される。器壁は磨滅するが外面はオサエの後ハケ、内面にはユビオサエ痕が観察される。3は脚部である。器形から高坏ではなくなんらかの脚台であ

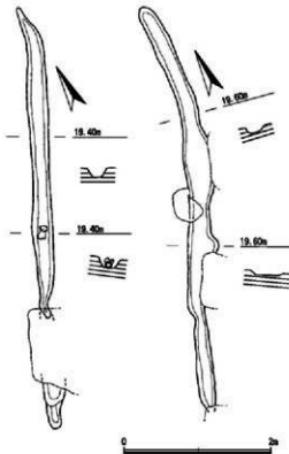


Fig. 43 SD97-111実測図 (1/60)

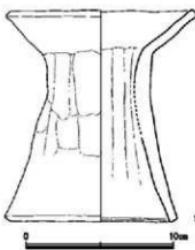


Fig. 44 SD97出土土器実測図 (1/3)  
壁が磨滅し不明瞭だが、口縁部付近の内面にヨコハケが観察される。2は縫である。口縁部から頸部上部にかけての小片。大形の個体で口径67.5cmに復元される。口縁部はくの字形に屈曲し、外面に波状の文様を有する。頸部に1条突帯を有し、断面形は台形を呈し、上部に板状の工具で×字ないしV字形の刻みを施している。何れの個体も胎土は精良で焼成は良好である。

(Fig.42) 第4層から鉄器が3点出土した。いずれも1枚の鉄板の端部を折り返し、鋒先または手鎌と推測される。器幅は何れの個体も4cm内外で研ぎ減りが顕著である。1は両端の折り返しが残存する個体で全体の約80%が残る。残存長11.4cm・器幅3.8cm・厚さ0.3cmを測る。2は左端部を欠損する個体で3と接合するとみられるが、接点がわずかで断言し得ない。残存長7.9cm・器幅4.1cm・厚さ0.2cmを測る。3は左端部の破片刃部は外側する。断面からは刃部がやや外反する。残存長4.6cm・器幅3.9cm以上

ろう。小片で残存高6.5cmを測り、底径11.6cmに復元される。脚部中ほどに径約7mmの孔を3箇所有する。焼成前に外側から穿孔している。器壁は磨滅し調整は不明瞭である。4は脚部の小片である。これも器形から高杯ではなくなんらかの脚台であろう。底径16.0cmに復元され、残存高6.6cmを測る。内外両面とも密なハケ調整がなされ、2箇所の孔を有する。焼成前に内側から穿孔し、バリを取り除いている。5は縫である。口縁部から頸部にかけての小片で残存高5.2cmを測る。6は縫である。底部の小片で残存高2.6cmを測る。7は器台である。口縁部の小片で口径16.2cmに復元される。口唇部はやや内傾し内面に2条の沈線が観察される。残存高2.5cmを測る。8は高杯である。脚部から杯部下半にかけての小片で、残存高19.8cmを測る。外側にはタテハケが観察され赤褐色を呈することから外側丹塗りであった可能性を有する。9は球状の土製品である。投弾か。完形で出土し長径3.0cm・重量18.6gを測る。外側はユビオサエ・ナデにて整えられる。

10・11は弥生土器である。10は縫である。脚部下半の小片で残存高9.7cmを測る。外側に突帯を1条有する。断面形はいびつな台形を呈し刻み目が観察される。内外両面にハケ調整が施され、外側は突帯を貼り付けた後に施されている。11は支脚である。いわゆる杏形容器台。下部を欠損する破片で残存高5.3cmを測る。上面に孔を有し焼成前に外側から斜めに穿孔している。突出部は粘土を引き出して成形する。

以上何れの個体も胎土は精良で焼成は良好である。(Fig.41) いずれも弥生土器である。1は縫である。口縁部から頸部上部にかけての小片で口径29.8cmに復元される。口縁部は内傾し、頸部に突帯1条這らす。

断面は不整な三角形を呈し刻み目を有する。調整は器壁が磨滅し不明瞭だが、口縁部付近の内面にヨコハケが観察される。2は縫である。口縁部から頸部上部にかけての小片。大形の個体で口径67.5cmに復元される。口縁部はくの字形に屈曲し、外面に波状の文様を有する。頸部に1条突帯を有し、断面形は台形を呈し、上部に板状の工具で×字ないしV字形の刻みを施している。何れの個体も胎土は精良で焼成は良好である。

・厚さは鉛のためか1m~2mと薄い。

#### SD97 (Fig.43)

調査区南東部で検出した。東西方向に延びる溝で東端はやや北方に曲がる。一部擾乱に切られるが延長約5.7mを検出した。幅25~30cm、深さ15~20cmを測り、断面形は逆台形を呈する。埋土は暗褐色土で底面まではほぼ均一な堆積である。流水の痕跡はみられない。

出土遺物 (Fig.44) 1は弥生土器である。器台で約70%残存する個体である。SD97の底面直上で出土した。口径12.2cm・器高14.3cmを測り、底径9.6cmに復元される。器壁は磨滅し調整は不明瞭だが、一部にユピナデの痕跡が観察される。胎土は精良で焼成は良好である。

#### SD111 (Fig.43)

調査区南東部で検出した。SC85を切る溝である。東西方向に延びており、西側を擾乱に切られるが延長約5.8mを検出した。SD97同様東端部をやや北に振る。東端の立ち上がりは急で、これ以上東には延びないと推測される。幅15~40cm、深さ6cm~10cmを測る。断面はカマボコ状で埋土は黒褐色土である。底面まで均一な堆積で流水の痕跡はみられない。

遺物は弥生土器とみられる細片が出土した。

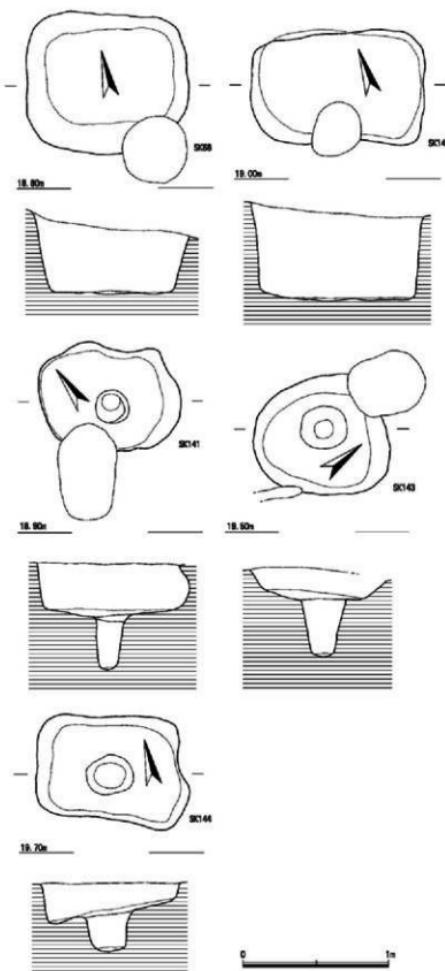


Fig. 45 SK68・141・142・143・144実測図 (1/30)

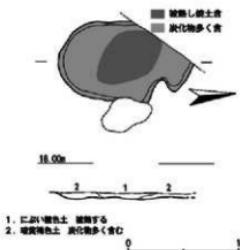


Fig.46 SR02実測図 (1/40)

SK141 (Fig.45)

調査区北西部で検出した。掘立柱建物SB202の南西柱穴に切られる。長軸を東西方向にもち、長径9cm・短径8cmを測る不整な橢円形を呈する。壁面は、東壁面がオーバーハングし断面形は箱状にならない。底面はほぼフラットだが中央に1基ピット状の掘り込みを有する。土壤底面から約40cmの深さがある。埋土は灰褐色土で遺構検出面から容易に検出できた。底面までほぼ均一な堆積状況である。

遺物は出土しなかった。

SK142 (Fig.45)

調査区北西部で検出した。南壁をピットに切られる。長軸を東西方向にもち、長径119cm・短径78cmを測る楕円形を呈する。壁面は北西壁がややオーバーハングするものの断面形は概ね逆台形となる。底面はほぼフラットでピット等の掘り込みはない。深さは68cmを測る。埋土はにぶい橙色土で地山との区別はつけにくいが、壁面の検出は比較的容易であった。

遺物は出土しなかった。

SK143 (Fig.45)

調査区中央部で検出した。ピットと竪穴住居SC73に切られる。長軸を東西方向にもち長径96cm・短径83cm以上を測る不整な楕円形を呈する。壁面はオーバーハングせず底面に接続し、断面形は逆台形となる。壁面の傾斜は他の土壤と比し緩やかである。底面やや西よりにピットを1基有し、底面から深さ40cm掘り込まれる。土壤の底面はこのピットに向かって緩く傾斜し、深さは検出面から20cmを測る。埋土は暗灰色土であった。

遺物は出土しなかった。

SK144 (Fig.45)

調査区南部中央で検出した。削平のためか周囲に遺構は検出されなかった。長軸を東西方向にもち、平面形は東西107cm・南北72cmを測る不整な方形を呈する。壁面にオーバーハングは認められず、断面形は逆台形となる。底面はほぼフラットだが西側が深くなる。ほぼ中央に1基ピット状の掘り込みを有し、土壤底面から28cmの深さがある。埋土は暗灰色土で底面まで概ね均一な堆積状況である。

遺物は出土しなかった。

⑤ピット出土の遺物 (Fig.47)

1はSP84出土の土師器である。脚部の小片で底径12.2cmに復元される。器壁は磨滅し調整は不明。残

④土壤 (SK)

5基検出した。掘立柱建物あるいは竪穴住居と重複するものもあるが、これらの遺構に後出する土壤はない。埋土は地山の粘質土に酷似する場合が多い。遺物が出土した土壤は1基のみである。

SK68 (Fig.45)

調査区東部で検出した。掘立柱建物SB201中央の柱穴に切られる。長軸を東西方向にもつ不整な方形を呈し、長径1.1m・短径0.9mを測る。断面形は逆台形を呈し深さ56cmを測る。

埋土はにぶい黄褐色土で、底面までほぼ均一な堆積である。

遺物は弥生土器とみられる細片が出土したが、いずれも器種を判別しうるものではない。

- 44 -

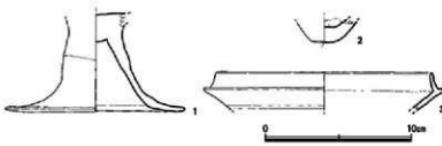


Fig. 47 ピット出土土器実測図 (1/3)

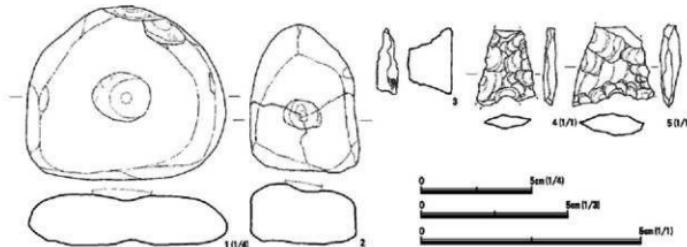


Fig. 48 第5次調査出土石器実測図 (1/4・1/3・1/1)

存高6.8cmを測る。2はミニチュア土器か。底部のみ残存する破片で底径1.6cmを測る。内底面にユビオサエ痕が観察される。残存高1.6cmを測る。3は須恵器である。坏身で口縁部から体部上部にかけての小片である。かえりは内傾し、残存高2.6cmを測り口径14.8cmに復元される。

#### ⑥炉跡 (SR)

##### SR02 (Fig.46)

調査区北西端で検出した。SD01第4層直上で検出され、SD01を埋めた直後、火をたいた痕跡である可能性がある。断面からは炭化物混じりの層が薄く堆積しその中央が被熱する状況が見て取れる。一時的に火をたいたもので継続して使用されたものではないと推測される。

#### ⑦第5次調査出土の石器および石製品 (Fig.48)

1はSD01出土の台石である。玄武岩質の扁平な円礫を用いる。縁辺部の一部を欠くがほぼ完形である。表裏中央に打痕が観察される。長径18.3cm・短径15.9cm、厚さは未使用部分で4.6cm、重量2.500gを測る。2はSD01出土の叩石である。花崗岩質の礫を用い表裏に円形の打痕が観察される。風化が顕著でその他の使用痕はわからない。長径10.1cm・短径7.2cm、重量445.3gを測る。3はSC77出土の砥石である。小片で矽岩質の石材を用い、研面には擦痕が観察される。残存長4.5cm、重量22.6gを測る。4・5は打製石器である。何れも安山岩質の石材を用いる。4はSP102出土、先端および片方の脚部を欠損する。残存長1.7cm・残存幅1.4cm、重量0.8gを測る。5はSC73出土。先端部および片方の縁辺を欠損する。残存長・残存幅とも1.8cm、重量1.4gを測る。

## 第5章 第5次調査のまとめ

飯倉F遺跡第5次調査では、掘立柱建物9棟・竪穴住居4軒・溝2条・溝状遺構1・土壙5基・炉跡1基を検出した。丘陵の傾斜変換点付近の調査であり、かつ過去の削平のため遺構の残りは悪いと予想されていた地点での調査であったが、第4次調査とならび第5次調査地点も予想以上の遺構が検出された状況であった。以下、調査を進めていく中で得られた所見を掘立柱建物・竪穴住居を中心に簡単にまとめてみたい。

掘立柱建物は上述のとおり9棟検出された。柱穴の並びで分類すれば①2×2間総柱・②1×2間・③1×1間、の3種にわけられよう。切り合い・重複をみれば、②・③は互いに重複するかあるいは①と切り合う。しかし①は互いに切り合うことはない。加えて①は溝状遺構SD01を切る。③には互いに重複する部分がみられ、この中でも構築時期に差がある。しかし溝状遺構SD01を切ることはない。

これらのことから①と②・③の間には時期差があり、なおかつ①はSD01埋没後に構築されていることがわかる。②・③の建物はSD01がまだ溝として残っていた時期、つまり弥生時代後期中葉～終末頃の所産と推測される。①の時期は古墳時代以降となろうが、出土遺物からは時期を特定しがたい。

一方建物の配置では、とりわけ2×2間総柱の建物に顕著なことだが、等高線に沿って建物が並んでいる。調査区東壁にトレンチを複数あけて地山の状況を確認したが、調査区下端部から東は崖となつて第4次調査区方面に落ち込み、SD01の延長は検出されなかつた。丘陵の落ち際に掘立柱建物を構築している状況が見て取れる。何らかの施設が丘陵中央部に存在したため丘陵の端部に建物を建てざるを得なかつたとも推測されるが、削平によりこの部分からは完全に遺構は消滅している。盛り土の状況からは削平した時の残土で丘陵北・東部を抜張し平坦面を造成していると推測される。

竪穴住居は4軒検出した。2×2間総柱の建物に切られる住居址があることからさくなくとも2×2間総柱の建物には先行する遺構とみられる。ほかに壁溝の可能性を有する溝が2箇所検出されたが、ここでは床面の広がりを検出し得たものを取り上げた。住居址は壁溝を避け、西または南で分岐させF字状とする。炉跡を有するものを2軒検出したが、何れの住居址も主柱穴の位置は不明瞭である。出土遺物は極少量で、時期の決め手に欠けるが、ベッド状遺構を有するとみられるSC85は弥生時代後期の住居址と推測され、SC73は出土した須恵器蓋から7世紀中葉～後半頃と推測される。もちろん住居址同士で時期の差はあるとみられるが、SC85以外の住居址は平面形が類似しており大きく差は間ないと考えている。とすれば、SC73を切る2×2間総柱の建物は8世紀以降の遺構である。

以上、遺構ごとに所見を簡単にしてまとめてきた。第4次調査において7世紀初頭～9世紀中葉の遺物包含層から精錬滓が出土し、丘陵上に製鉄炉があつた可能性については第3章で述べたが、第5次調査での目標の一つに製鉄炉の検出があつた。しかし製鉄炉とおぼしき遺構は検出できなかつた。ここで注目されるのが丘陵落ち際に並ぶ掘立柱建物である。何らかの施設が丘陵中央部に存在したため丘陵の端部に建物を建てざるを得なかつた可能性は既に述べた。これから先は想像だが、丘陵中央部に存在した施設とは製鉄炉群で、製鉄に携わる工人たちの小屋として2×2間総柱の建物が丘陵端部に沿って構築されたとも考えられる。もちろん実際に製鉄炉は検出されず、第4次調査出土鉄滓と2×2間総柱の建物の時期も特定できていないが、鐵滓を含むのは7世紀初頭～9世紀中葉の遺物包含層で、遺構の切り合いから推測される2×2間総柱の建物の8世紀以降という時期に矛盾はない。さらに住居址には7世紀中葉～後半頃の須恵器を出土したものがあり、2×2間総柱の建物に切られる。当初竪穴住居だった製鉄に携わる工人たちの小屋が掘立柱建物に変わったことを示すものかもしれない。



1. 調査区北部全景（東より）



2. 調査区南部全景（東より）



3. SB03・202（東より）

PL. 2



1. SB06 (西より)



2. SB12 (西より)



3. SB201 (西より)



1. SB203 (南より)



2. SB205 (東より)

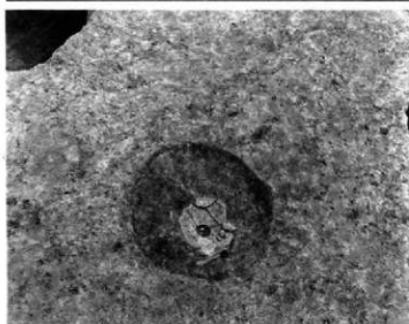


3. 穴住性層SC73・77・85 (東より)

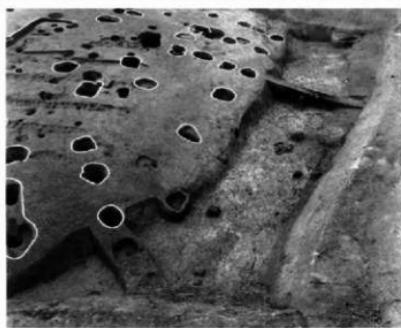
PL. 4



1. SC28 (南より)



2. SC77炉跡 (南より)



3. テラス部 (SD01) 全景 (東より)

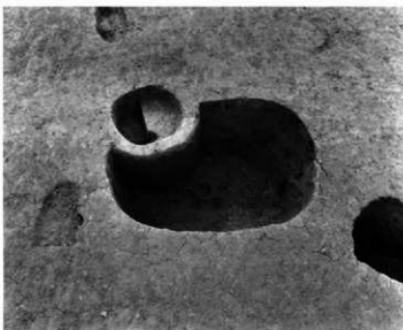
1. テラス部(SD01)土層断面(東より)

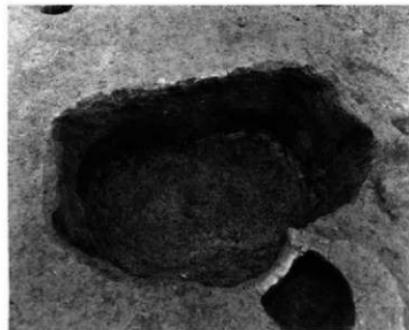


2. 炉跡SR02(北より) SC77(西より)

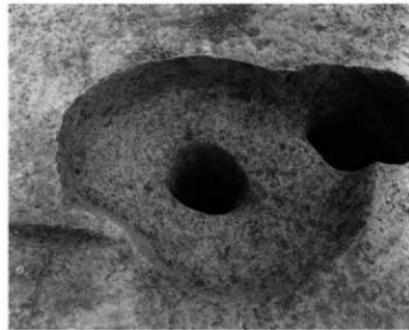


3. SK68(北より)

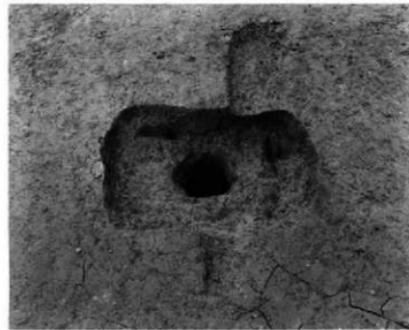




1. SK142 (南より)



2. SK143 (東より)



3. SK144 (南より)

## 報告書抄録

ふりがな	いいくらえふいせき				
書名	飯倉F遺跡				
副書名	飯倉F遺跡群第4次・第5次調査報告				
巻次	2				
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	972				
編著者名	阿部泰之				
編集機関	福岡市教育委員会				
所在地	福岡市中央区天神1-8-1				
発行年月日	2008年3月31日				
調査面積	1,862.9m <sup>2</sup> (第4次調査) 953.3m <sup>2</sup> (第5次調査)				
調査原因	西南杜の湖畔公園整備工事				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 (世界測地系)	調査期間
飯倉F遺跡第4次	ふくおか県福岡市城南区七隈6-1他	40136	0253	33° 33' 06"	130° 21' 25"
飯倉F遺跡第5次	ふくおか県福岡市城南区七隈6-14他	40136	0253	33° 33' 07"	130° 21' 23"
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯倉F遺跡第4次	集落	弥生時代+古代	掘立柱建物3+溝3	須恵器+弥生土器	祭祀圓塚の建物か
飯倉F遺跡第5次	集落	弥生時代+古代	掘立柱遺物9+匂穴住居4+溝2+土塀5	弥生土器+須恵器	遺物は丘陵端部に沿って並ぶ 鐵製鎧先出土
要約	<p>第4次調査では4×4間の掘立柱建物を検出した。土器を埋納したピットが検出されるなど祭祀に関連する遺構と推測される。</p> <p>第5次調査では丘陵端部に沿って並ぶ掘立柱建物群が検出された。丘陵北縁の堆積層からは弥生時代後期前半頃と推測される鐵製鎧先が2点出土している。</p>				

## 飯倉F遺跡2

-飯倉F遺跡第4次・第5次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第972集

平成20年3月31日

発行 福岡市教育委員会  
 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社 アイオー企画印刷  
 福岡市南区檜原2丁目3番5号

